深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第81集

白　山　遺　跡　Ⅱ

２００６

深谷市教育委員会

深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第81集

白　山　遺　跡　Ⅱ

２００６

深谷市教育委員会

5号住居跡出土遺物

序

埼玉県北部に位置する旧深谷市・旧岡部町・旧川本町・旧花園町の１市３町が合併し、平成18年１月１日をもって新たに深谷市が誕生しました。市域の南は比企丘陵と接し、北端は群馬県と接しています。この広大な市域の間を利根川・荒川という国内でも有数な大河川が貫流しています。

こうした豊かな自然環境のもと、古代人の暮らした足跡が埋蔵文化財として今なお多く眠っています。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡をはじめとして、再葬墓で著名な上敷免遺跡、県指定史跡の鹿島古墳群、榛沢郡家正倉跡と想定される「中宿古代倉庫群跡」や国指定重要文化財「緑釉手付瓶」を検出した西浦北遺跡など、重要な遺跡が多数存在します。

今回報告する白山遺跡においては、昭和45年～47年にかけて大規模な発掘調査が実施され、古墳跡24基、奈良～平安時代の竪穴住居跡90軒余をはじめとして、中世の居館跡なども検出され、注目を集めました。特に、古墳跡から出土した人物埴輪６体は、ほぼ原型を留めた貴重なものであり、市指定文化財となっています。

本報告書は、アパート建設に先立ち平成10年に実施した白山遺跡７次調査の成果をまとめたものです。特に５号住居跡から出土したクルル鉤は注目されるべき資料であり、白山遺跡の性格を考える上での貴重な資料を追加することができました。本書が学術・教育関係はもとより、文化財の保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成18年11月

深谷市教育委員会

教育長　猪野幸男

例　言

1．本書は、埼玉県深谷市普済寺および岡里に所在する白山遺跡の、平成10年度に実施した第７次発掘調査の成果をまとめたものである。

2．文化財保護法第57条の３第１項に基づく事業者宛の指示通知は、次の通りである。
　平成10年８月20日付　教文第３－３２７号

3．文化財保護法第57条第１項に基づく発掘調査の通知は、次の通りである。
　平成10年８月20日付　教文第２－８５号

4．発掘調査は、宮本直樹と竹野谷俊夫が担当し、平成10年８月５日～平成10年９月10日にかけて実施した。

5．出土品の整理及び実測・観察表作成は、竹野谷俊夫が行った。

6．図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が担当した。

7．本書の執筆は、宮本直樹が行なった。

8．本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　例

1．発掘調査位置図は岡部町都市計画図（1/2,500及び1/10,000）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/25,000）を使用した。

2．遺構実測図は、現場では基本的に1/20、カマド実測図を1/10とし、本書掲載の段階で1/60及び1/30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。

3．図中の方位は、座標北を示す。

4．遺物観察表の数値に（　）のあるものは推定値、《　》のあるものは残存値を示す。
　残存率は、図示した器形に対する大まかな残存程度を％で示した。

5．土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。

6．遺構実測図中の英数字は、以下を表す。
　SJ 竪穴住居跡　　SB 掘立柱建物跡　　SK 土坑

目　次

序

例言・凡例

目次

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過 …… 1

1．発掘調査の経緯 …… 1

2．発掘調査・整理報告の経過 …… 1

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 2

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境 …… 4

1．地理的環境 …… 4

2．歴史的環境 …… 4

Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 6

1．白山遺跡の概要 …… 6

2．発見された遺構と遺物 …… 6

Ⅳ　調査成果のまとめ …… 29

挿図目次

第１図　白山遺跡の範囲……　3
第２図　白山遺跡７次調査地点位置図……　3
第３図　周辺の遺跡分布……　5
第４図　白山遺跡（７次調査）全測図……　7
第５図　１号住居跡実測図……　8
第６図　１号住居跡遺物出土状況図……　8
第７図　１号住居跡カマド実測図……　9
第８図　１号住居跡出土遺物実測図……　10
第９図　２号住居跡実測図……　11
第10図　２号住居跡カマド実測図……　12
第11図　２号住居跡出土遺物実測図……　13
第12図　３号住居跡及び出土遺物実測図……　14
第13図　４号住居跡実測図……　14
第14図　４号住居跡出土遺物実測図……　15
第15図　５号住居跡実測図……　16
第16図　５号住居跡カマド実測図……　17
第17図　５号住居跡遺物出土状況図……　17
第18図　５号住居跡出土遺物実測図(1)　……　18
第19図　５号住居跡出土遺物実測図(2)　……　19
第20図　５号住居跡出土遺物実測図(3)　……　20
第21図　５号住居跡出土遺物実測図(4)　……　21
第22図　６号住居跡実測図……　23
第23図　６号住居跡カマド実測図……　24
第24図　６号住居跡出土遺物実測図(1)　……　24
第25図　６号住居跡出土遺物実測図(2)　……　25
第26図　１号掘立柱建物跡実測図……　27
第27図　１～３号土坑実測図……　28
第28図　土坑及びピット出土遺物実測図……　28
第29図　白山遺跡７次調査区周辺遺構図……　30
第30図　鉤実測図……　31

写真図版目次

図版１　全景・１号住居跡
図版２　１・２・３・４号住居跡
図版３　５号住居跡
図版４　５・６号住居跡、１号掘立柱建物跡、１号土坑
図版５　１・２・５号住居跡出土遺物
図版６　５号住居跡出土遺物
図版７　５号住居跡出土遺物
図版８　５・６号住居跡、１・２号ピット出土遺物

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過

1．発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の遺跡として有名な西谷遺跡や、弥生時代の再葬墓を検出した四十坂遺跡、重要文化財「緑釉手付瓶」を出土した西浦北遺跡など、著名な遺跡が多い。現在は、145の遺跡が確認されている。

白山遺跡は、ＪＲ高崎線岡部駅の北東に位置する。県道蛭川普済寺線と国道17号線に挟まれた範囲であり、東西680m、南北500mを測る。遺跡の西境には埋没谷が存在し、その西方には初期評家と想定される熊野遺跡が展開する。

白山遺跡の発掘調査は、工場建設に先立ち昭和45年に埼玉県教育委員会により実施されたのが始まりである。約7,000㎡におよぶ調査の結果、奈良～平安時代の掘立柱建物跡４棟、80軒以上の竪穴住居などが検出され、多数の土器類や鉄製品が出土した。

47年には、団地造成に伴い１次調査地点の北側40,000㎡の範囲が調査され、古墳跡24基（円墳23、帆立貝式１）、古墳～平安時代の竪穴住居跡６軒が検出された。埴輪には人物埴輪や器財埴輪をはじめとして、多数の円筒埴輪などあるが、なかでも巫女と想定される女性埴輪５体と男性の弾琴埴輪１体がほぼ完形で出土したのは特筆される。さらに、方形に巡る区画溝を有する中世の館跡や掘立柱建物跡も検出された。

その後も、工場やアパート建設、個人住宅建築などに先立ち、発掘調査が随時実施されてきた。

今回報告する発掘調査は、アパート建設に伴い平成10年に実施したものである。

まず、平成10年３月11日に、内田キヨ氏（以下、「事業主」と記す）から旧岡部町教育委員会（以下「町教委」と記す）に、埋蔵文化財の所在についての照会があった。町教委では、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が白山遺跡の範囲内であること、遺構の存在の有無を確認するための試掘調査を実施する必要があることを書面にて回答した。その後、事業主から試掘調査依頼書が提出されたのを受けて、６月８日に実施したところ、竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑などを確認した。

これをふまえて、町教委と事業主とで協議を重ねたが、工事の変更は不可能であり、遺跡の破壊は免れないことが確実となった。このため、記録保存のための発掘調査を岡部町遺跡調査会が実施することで調整を進めた。事業主もこれを了承し、平成10年７月30日付けで文化財保護法57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、町教委を経由して文化庁長官宛に提出された。

これを受けた岡部町遺跡調査会では、文化財保護法57条の１に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を所定の手続きを経て文化庁へ提出した。

埋蔵文化財発掘届に対する事業者宛の指示通知は、平成10年８月20日付け教文第３－327号においてなされた。

実際の発掘調査は、平成10年８月５日に開始し、同年９月10日まで実施した。

2．発掘調査・整理報告の経過

(1)　発掘調査の地番及び遺跡番号

白山遺跡の埼玉県遺跡登録番号は、№63－008である。

調査区の地番は、深谷市普済寺字前耕地1404番地である。

今回報告するのは、白山遺跡における第７次調査にあたる。

(2)　表土除去

発掘調査は、平成10年８月５日から着手した。作業は、まずバックホーによる表土除去から始めた。

表土から30～50cm掘り下げると黄褐色ローム面が表れたので、これを遺構確認面とした。

全ての作業を終えるのに、１日を要した。

(3)　遺構確認・基準点測量

表土除去に引き続き、翌６日には調査補助員が調査現場に入り、遺構確認作業を実施した。その結果、竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡１棟、土坑３基、そのほかにも多数のピットを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、遺構の掘り下げを開始した。

(4) 遺構掘り下げ及び図化作業

遺構の掘り下げは、調査区西端の１号住居跡から始めた。

遺物は極力原位置を保つようにし、出土状況の写真撮影を行い、その後１/20の縮尺で図化した。なお、基準点測量については、株式会社東京航業研究所に委託し、８月10日に実施した。

遺物を取り上げた後、床面の精査を行い、柱穴・壁溝などを検出し、掘り下げを実施した。さらに、カマドの調査が終了したところで、完掘状況の写真撮影を実施して、順次東方の遺構へ移動していった。

竪穴住居跡をはじめとして、他の掘立柱建物跡や土坑なども同様に調査を進めた。全ての遺構の掘り下げが終了した時点で、調査区全体の写真撮影を実施し、その後全測図を作成した。

調査の全工程が終了し、機材やプレハブ等の撤収が完了したのは、平成10年９月２日のことであった。

(5) 整理・報告

発掘調査で検出された遺物の水洗・接合は、平成17年８月より開始した。これと並行して、図面の整理作業を行なった。遺物の実測は平成17年10月から始め、終了後に写真撮影を実施した。翌18年１月以降、図版の作成と原稿の執筆を行い、印刷を開始したのは10月のことであった。

報告書の印刷が完了したのは、11月20日の事である。

３．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

(1) 発掘調査（平成10年度）

岡部町教育委員会	教育長	大野　福治
	文化財保護室長	今井　宏
	文化財保護次長	米沢　信夫
	主任	中野　弘
	主任	鳥羽　政之
	主事	平田　重之
	〃	宮本　直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫

発掘調査参加者

大野　ハツ	大野カネ子	岡　和夫
小暮　辰治	小暮　雄一	斎藤　好江
渋沢　ヤイ	高橋ちよ子	田嶋　律子
田中　秀子	橋本　純子	長谷川カネ
畑山せつ子	平野イキ子	根岸　達夫
根岸　弘子	三浦　フミ	山田　勇平
矢内　忠良		

(2) 整理・報告書刊行（平成18年度）

深谷市教育委員会	教育長	猪野　幸男
	教育次長	古川　国康
	次長	中村　信雄
同岡部教育事務所	所長	柳田　一郎
	課長補佐	鈴木八十子
	主査	金井登美子
	〃	根岸　宏
	〃	鳥羽　政之
	〃	森田　富雄
	〃	宮本　直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫
	〃	黒澤　恵
	〃	佐藤　由江
	〃	布施みゆき

第１図　白山遺跡の範囲

第２図　白山遺跡７次調査地点位置図

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境

1．地理的環境

白山遺跡は、埼玉県深谷市普済寺字白山他に所在する。JR高崎線岡部駅の北東に位置し、遺跡の西半部は現在岡里団地となっている。

深谷市は、西端が本庄台地、西部が櫛挽台地、南部が江南台地上にのり、東部から北部域は妻沼低地上に立地する。市の北端を利根川が東流し、南部を荒川が貫流する。

白山遺跡は、櫛挽台地北端部からやや内陸部にかけて位置する。遺跡の中心から300m北は崖線となり、眼下には妻沼低地が広がる。

2．歴史的環境

白山遺跡の立地する櫛挽台地北部は、駅に近いことや国道17号線が通ることなどから早くから開発も進み、これに伴う発掘調査も多数実施されてきた。その結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から押圧縄文・爪形文土器などが検出され、草創期の土器として注目されてきた。遺構では、四十坂遺跡で前期の竪穴住居跡が、上宿遺跡で後期の敷石住居跡が検出されている。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。その後、平成２年の発掘調査では、弥生土器を伴う再葬墓や土坑墓群が検出され、良好な資料の追加となった。

古墳時代に至ると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期に至る方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連綿と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鋲留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から５世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、６世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稲荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動して築造されることが看取され、首長の系譜を窺い知ることができる。この他に、白山遺跡からは、６世紀代の古墳跡24基（円墳23、帆立貝式古墳１）が調査された。弾琴埴輪や壺を捧げ持つ巫女の埴輪など６体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土したほか、多くの円筒埴輪や朝顔形埴輪も出土している。

なお、櫛挽台地北部における古墳時代の集落は、現在のところ中宿遺跡など数か所が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛挽台地以外に分布の中心がある。

奈良・平安時代になると、様相が一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如大集落が営まれる。これまでに162次に及ぶ調査が実施され、700軒を超える竪穴住居跡、150棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、円面硯・帯金具・唐三彩の陶枕・刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど一般の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

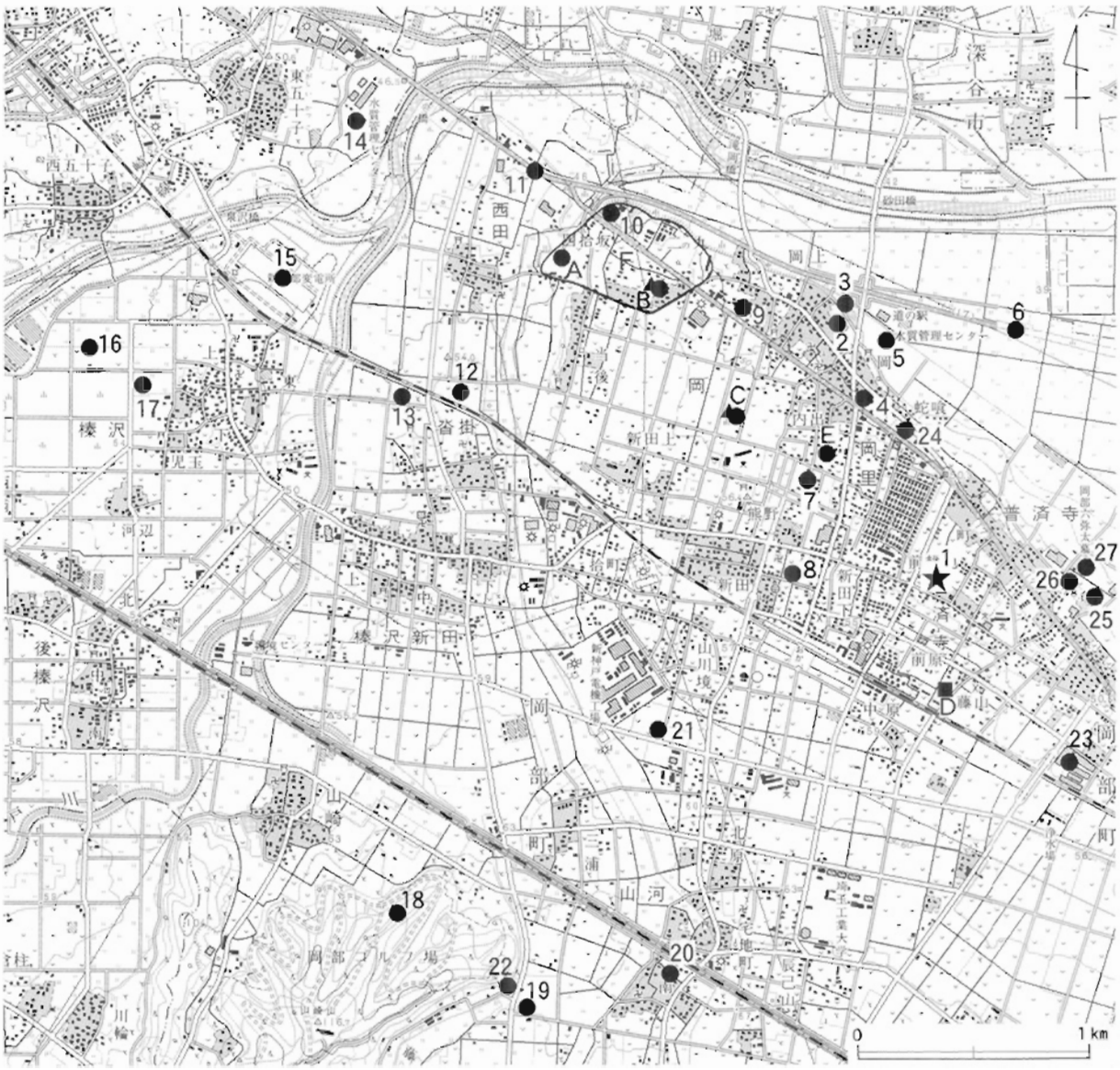
なお、集落の開始時期は、131次調査１・２号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と考えられている。１次調査では、この時期に該当する７間×３間の掘立柱建物跡をはじめとする大規模建物群が検出されており、初期評家の性格が与えられている。

また、櫛挽台地縁辺部に立地する中宿遺跡からは、大規模な倉庫跡20棟が規則的に配置された状態で検出され、榛沢郡衙正倉跡と推定されている。

これらと前後して周辺の白山遺跡・岡遺跡・上宿遺跡・新田遺跡などにも集落が営まれるようになる特に、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡は、８世紀第２四半期と考えられる蓮華文などの瓦が多量に採集されていたが、近年の確認調査により、掘込み地業を伴う基壇状の遺構が検出され、近接する住居跡からは「寺」と墨書された土器も発見され、廃寺跡であることが確実となった。

このように、奈良～平安時代の櫛挽台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

中世では、白山遺跡や熊野遺跡・西龍ヶ谷遺跡から方形に巡る溝跡が検出され、館跡に付属するものと推定されている。特に西龍ヶ谷遺跡では、軸を揃えて並んだ６棟の掘立柱建物群が確認され、その企画性から在地有力者層の館跡と想定されている。



1．白山遺跡　（古墳群・律令期集落・中世居館）
2．中宿遺跡　（郡衙正倉・律令期集落）
3．滝下遺跡　（河川跡・律令期集落）
4．岡廃寺　（寺院跡・古墳～律令期集落）
5．岡部条里遺跡　（古墳集落・条里水田・律令期居宅）
6．砂田前・樋詰遺跡　（古墳～平安集落）
7．熊野遺跡　（律令期集落・官衙・中世居館）
8．新田遺跡　（律令期集落）
9．上宿遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
10．四十坂遺跡　（縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群）
11．原ケ谷戸遺跡　（縄文・古墳集落・古墳群）
12．水窪遺跡　（縄文・古墳集落・周溝墓・古墳群）
13．新井遺跡　（律令期集落）
14．東五十子遺跡　（古墳・中世集落）
15．六反田遺跡　（古墳・中世集落）
16．大寄遺跡　（縄文・弥生～律令期集落）
17．西浦北遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
18．千光寺遺跡　（古墳群・平安集落）
19．茶臼山遺跡　（古墳群）
20．伝上杉館跡　（中世）
21．西龍ヶ谷遺跡　（律令期集落・中世居館）
22．西谷遺跡　（縄文）
23．上原遺跡　（縄文・古墳・奈良～平安）
24．塚東遺跡　（古墳・律令期集落）
25．伝岡部六弥太館跡　（鎌倉・南北朝）
26．菅原遺跡　（縄文・古墳～平安・室町）
27．岡部六弥太墓　（鎌倉～室町）
A．四十坂浅間山古墳　（円墳）
B．寅稲荷塚古墳　（前方後円墳）
C．お手長山古墳　（帆立貝式古墳）
D．前原愛宕山古墳　（方墳）
E．内出八幡塚古墳　（円墳）
F．四十塚古墳群　（古墳群）

第３図　周辺の遺跡分布

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1．白山遺跡の概要

白山遺跡は、櫛挽台地北端部に展開する。遺跡の標高は55m前後であり、南西から北東に向かって緩やかな傾斜を有している。遺跡から北東へ約600mで台地縁辺部に達し、眼下には利根川及び小山川により開析された妻沼低地が開けている。沖積地との比高差は、約18m程である。

遺跡はJR高崎線岡部駅の北東500mに位置し、国道17号線と県道蛭川普済寺線に挟まれた範囲である。かつては民家が少なく、畑地の広がる地域であった。

白山遺跡は、古墳群および奈良時代～中世にかけて営まれた複合遺跡である。初期評家と推測される熊野遺跡とは、埋没谷を挟み東に接する。

発掘調査は、工場建設に先立ち昭和45年に埼玉県教育委員会により実施されたのが始まりである。約7,000㎡におよぶ調査の結果、奈良～平安時代の掘立柱建物跡４棟、80軒以上の竪穴住居などが検出され、多量の土器類や鉄製品が出土した。

47年には、団地造成に伴い１次調査地点の北側40,000㎡の範囲が旧岡部町教育委員会により調査され、古墳跡24基（円墳23、帆立貝式１）、古墳～平安時代の住居跡６軒が検出された。古墳周溝からは、人物埴輪や馬形埴輪・器財埴輪をはじめとして、多数の円筒埴輪などが出土した。なかでも巫女と想定される女性埴輪５体と男性の弾琴埴輪１体がほぼ完形で出土しており、平成９年には町指定文化財となった。また、中世の遺構では、方形に巡る溝をもつ館跡や掘立柱建物跡が検出されている。

その後も、工場やアパート建設・個人住宅建築などに先立ち発掘調査が実施されており、現在までに８地点に及んでいる。

2．発見された遺構と遺物

今回報告する７次調査地点は、深谷市普済寺字前耕地1404番地である。遺跡のやや南寄りに位置する。

発掘調査により検出された遺構は、奈良～平安時代に属する竪穴住居跡６軒、時期不明の掘立柱建物跡１棟、土坑３基、ピット多数である。遺構ごとの重複は、あまりない。また、東西に細長い調査範囲のため、完掘できた遺構は少なかった。

以下、遺構ごとに順を追って詳述する。

１号竪穴住居跡

調査区の西端に位置する。

西半部が調査区域外にあるため、規模等は不明である。平面形態は、正方形あるいは長方形を呈すると考えられる。南北軸で3.58mを測り、東西軸は3.35m以上となる。主軸方位は、N-116°-Eを示す。

壁はやや角度をもって掘り込まれ、床面は平坦である。確認面からの深さは、63cm前後を測る。

ピットは６基が検出された。最大のものは平面楕円形で、長軸53cmを測る。床面からの深さは、15cmである。最小は直径14cm、深さ５cmを測る。

壁溝は北壁と南壁に沿って検出された。幅は25cm前後、床面からの深さは10cmを測る。

カマドは、東壁の中央を削り出し、袖は粘土を造り付けて構築されていた。右袖98cm、左袖104cmを測る。

燃焼部は、長さ141cm、最大幅52cmを測る。底面は平坦で、煙道に向かってやや角度をもち立ち上がる。

出土遺物は比較的少なく、床面上や覆土から土師器の坏・甕・台付甕、土師質土器の甑、須恵器の坏・蓋などが出土した。時期は８世紀後半と考えられる。

２号竪穴住居跡

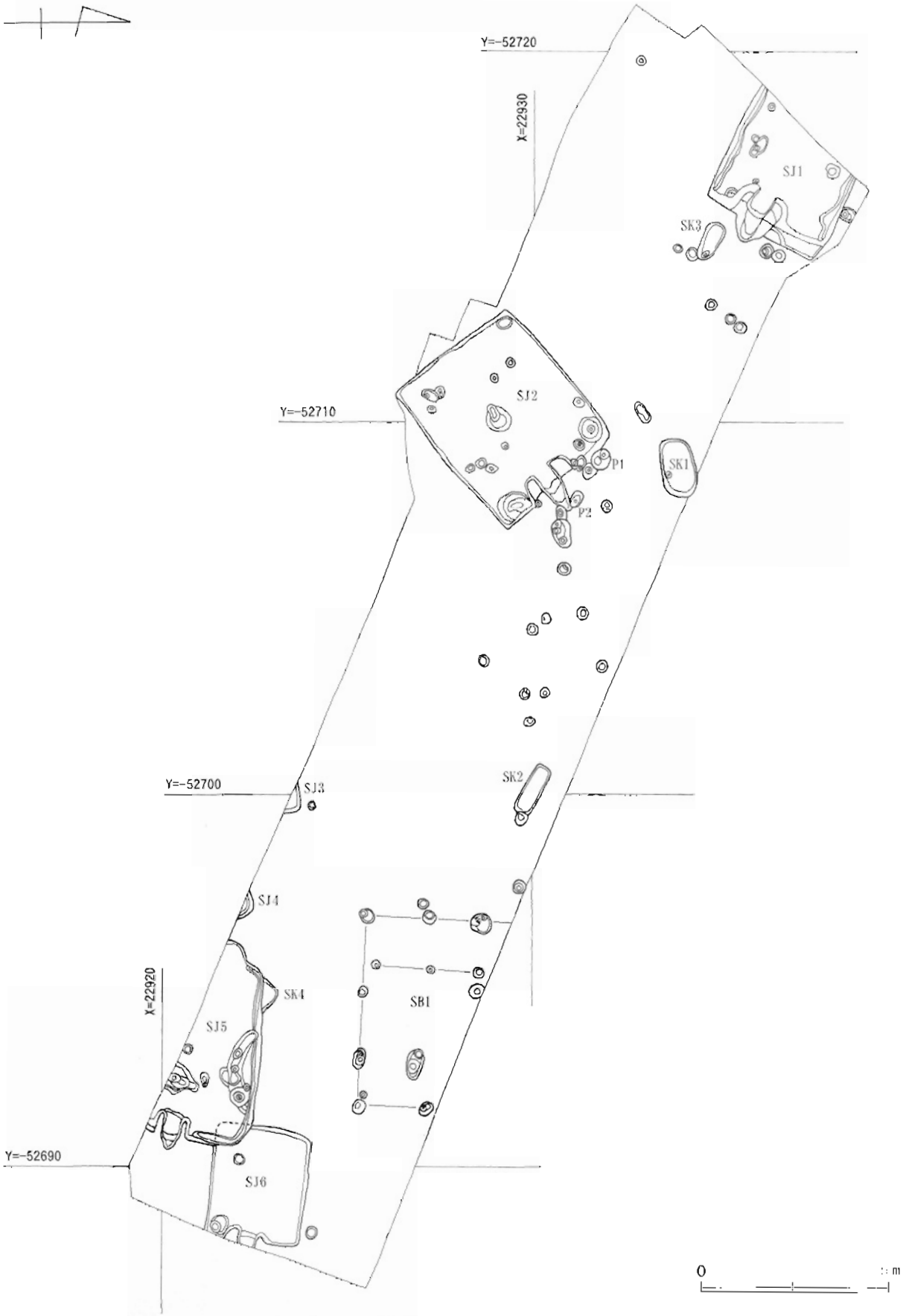
調査区の中央やや西寄りに位置する。他の遺構との重複関係はない。

長軸4.75m、短軸3.96mを測る。平面形態は、長方形を呈する。

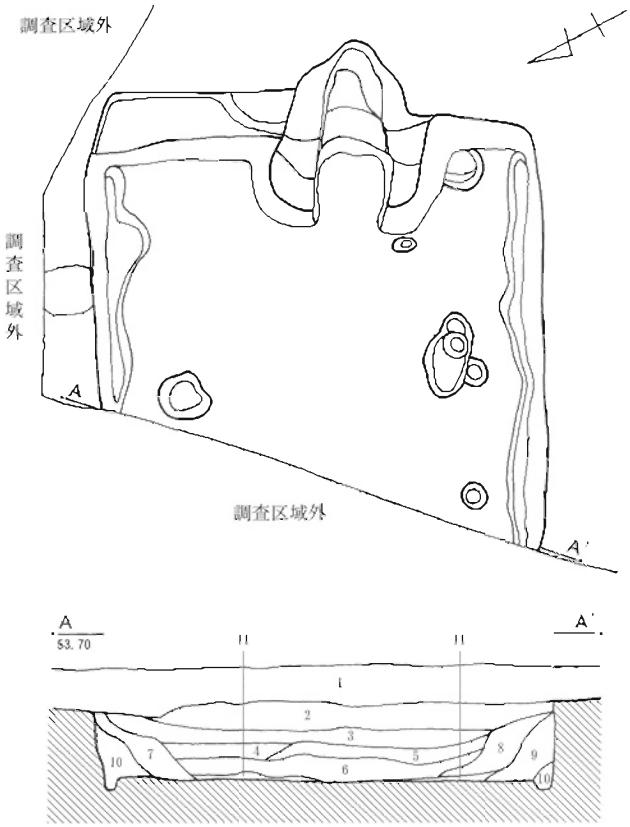
主軸方位は、N-49°-Eを示す。

床面は多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。壁はやや角度をもって掘り込まれ、確認面からの深さは約35cmを測る。

床面上において、３基の浅い土坑が検出された。１号土坑は東コーナー付近において検出された。平面形態は円形で、直径90cm、床面からの深さは15cmである。２号土坑は北コーナー付近で検出された。



第４図　白山遺跡（７次調査）全測図

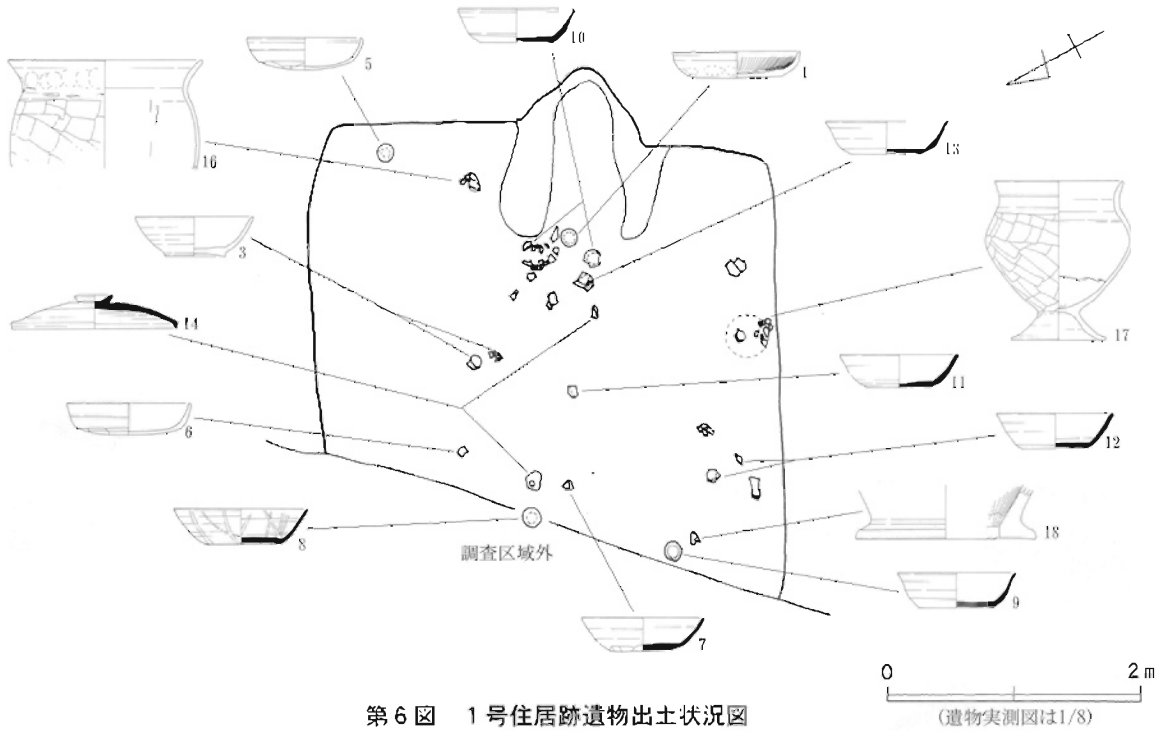


【1号住居跡土層説明】

1	暗褐色土	浅間A軽石を多量、ローム粒を少量含む。
2	暗茶褐色土	ローム粒を多量、炭化粒を微量含む。しまりあり、粘性なし。
3	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量、炭化粒を微量含む。しまりあり、粘性なし。
4	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒を微量含む。しまりあり、粘性なし。
5	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック・粘土粒多量、焼土粒を少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
6	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒・炭化物炭化粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
7	暗茶褐色土	ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒微量含む。しまりあり、粘性なし。
8	暗黄褐色土	ローム粒・ロームブロックを多量含む。しまり弱い、粘性なし。
9	明黒褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量、焼土粒を微量含む。しまりあり、粘性なし。
10	暗茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量含む。しまりよい、粘性なし。
11	明黒褐色土	ローム粒少量、焼土粒・炭化粒微量含む。しまりよい、粘性なし。

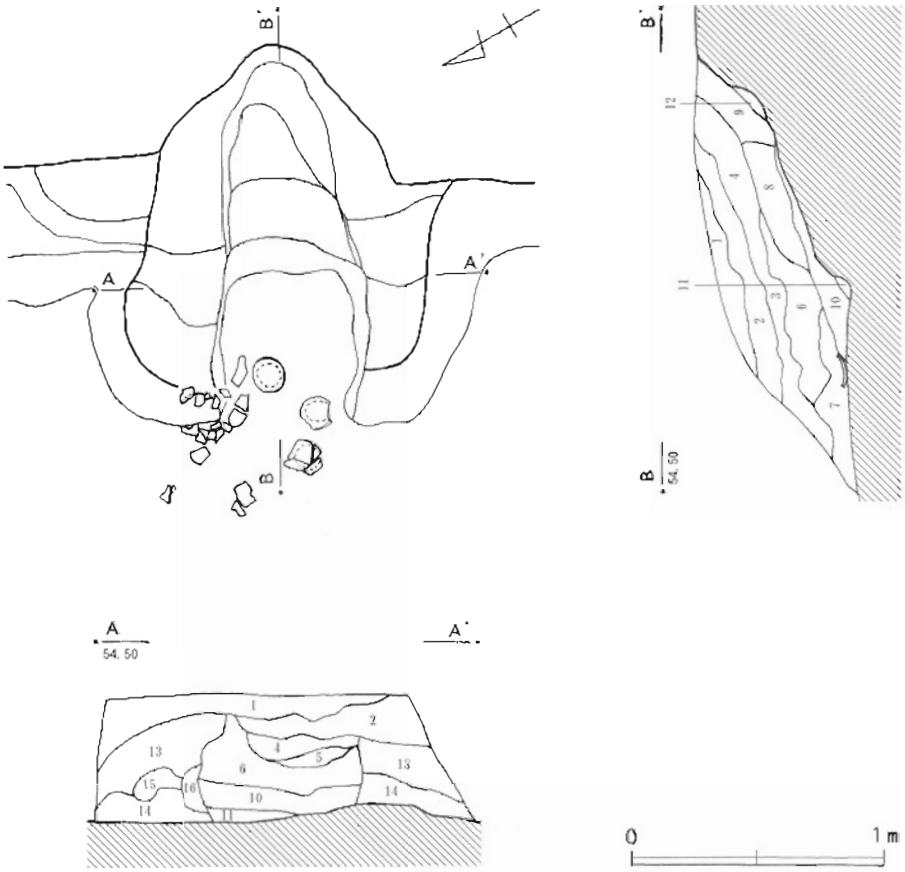
0　2m

第5図　1号住居跡実測図



第6図　1号住居跡遺物出土状況図

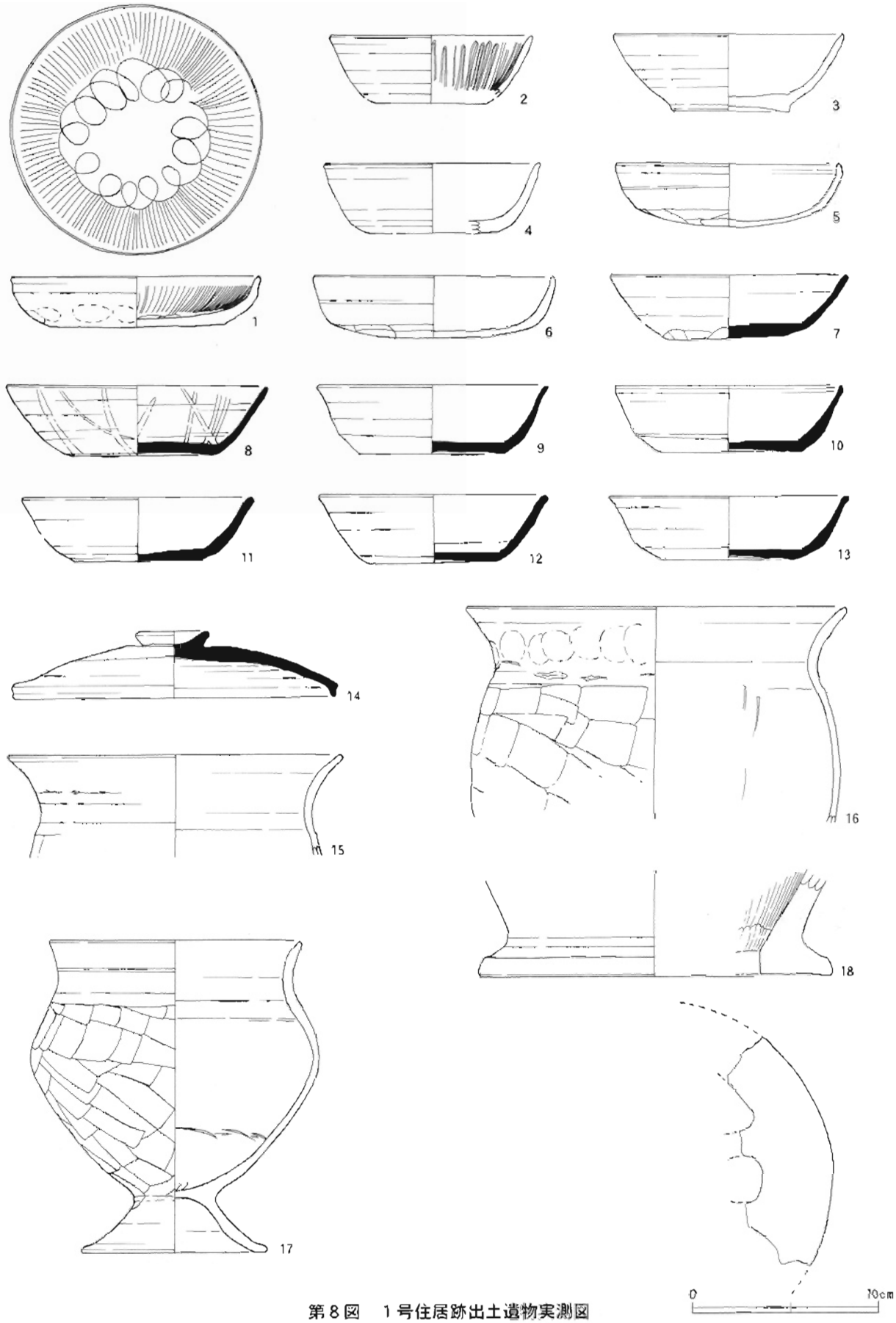
(遺物実測図は1/8)



【1号住居跡カマド土層説明】

1　暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。しまりあり.粘性なし。
2　暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒・粘土粒少量、炭化物微量含む。しまりあり、粘性なし。
3　明黒褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
4　暗灰褐色土　粘土多量、ローム粒・ロームブロック・焼土粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
5　明灰褐色土　粘土多量、ロームブロック・炭化粒を少量含む。しまりよい、粘性ややあり。
6　暗赤褐色土　焼土粒・粘土を多量、ローム粒少量含む。しまりよい、粘性ややあり。
7　明灰褐色土　粘土主体。焼土粒・ローム粒を少量含む。しまりよい、粘性あり。
8　暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒・粘土を少量、炭化物微量含む。しまりよい、粘性ややあり。
9　明赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック多量、ローム粒・粘土を少量含む。しまりよい、粘性ややあり。
10　赤褐色土　焼土ブロック多量、ローム粒少量含む。しまり・粘性なし。
11　明赤褐色土　焼土ブロック主体。しまりややあり。（火床面）
12　暗黄褐色土　ローム粒多量、焼土粒少量含む。しまりやや弱い、粘性なし。
13　暗黄褐色土　粘土多量、ローム粒・焼土粒・炭化粒少量含む。しまり強い、粘性ややあり。
14　暗灰褐色土　粘土多量、ロームブロック・焼土粒を少量含む。しまり強い、粘性あり。
15　暗黄褐色土　ロームブロック・粘土・焼土粒を少量含む。しまり強い、粘性ややあり。
16　暗赤褐色土　焼土ブロック多量、粘土・ロームブロック少量含む。しまりやや強い、粘性なし。

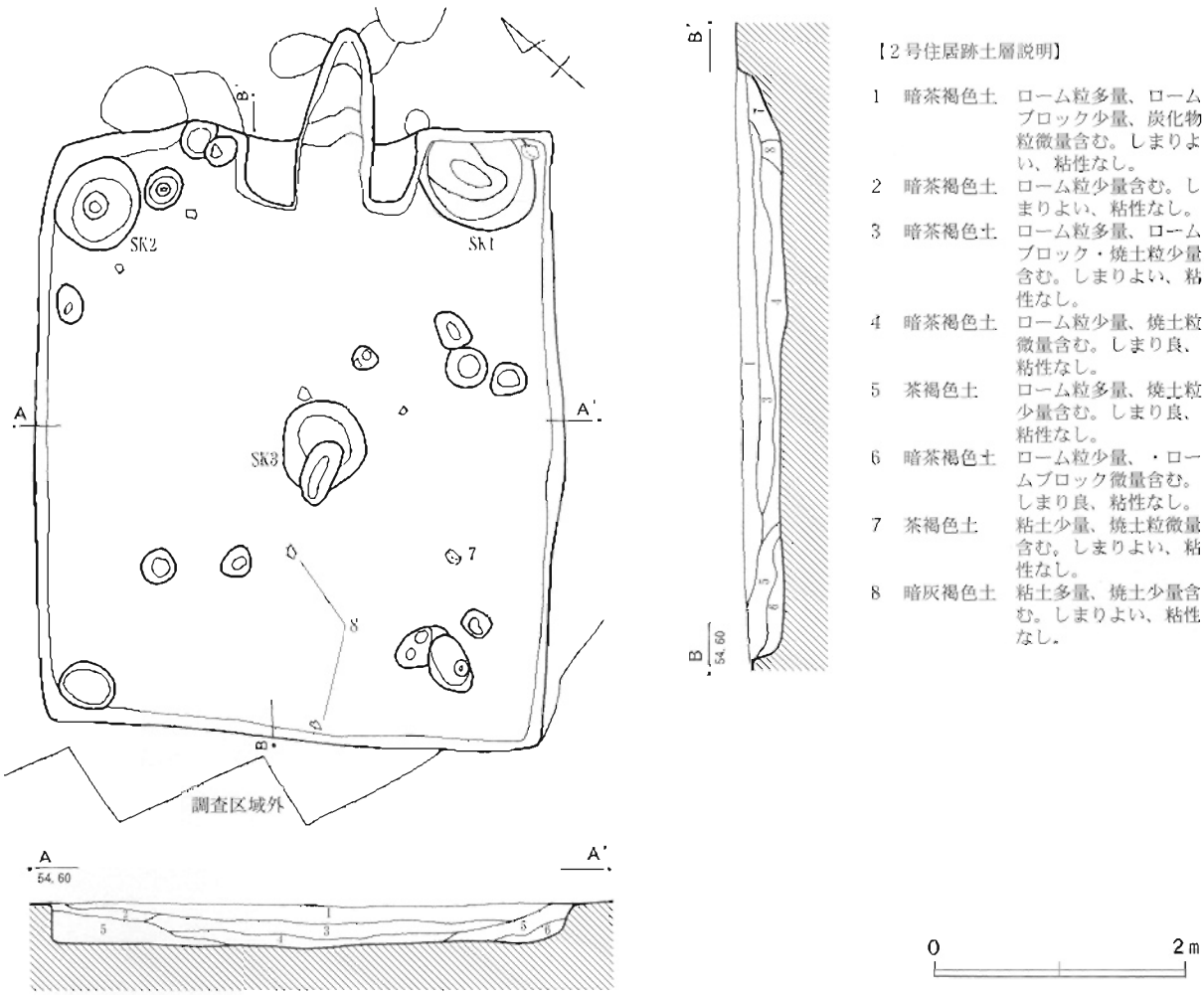
第7図　1号住居跡カマド実測図



第８図　１号住居跡出土遺物実測図

1号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	13.2	2.7	9.3	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒	99%	カマドNo.3、らせん＋放射状暗文、在地産
2	〃	(10.8)	《3.4》	-	赤褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	覆土下層、放射状暗文、ロクロ土師器
3	〃	12.3	4.2	6.2	〃	〃	石英、チャート、微砂粒	図示80%	No.16、ロクロ土師器、回転糸切り未調整
4	〃	(11.5)	3.8	(7.0)	〃	普通	石英、角閃石	図示20%	覆土上層、ロクロ土師器、手持ちヘラ
5	〃	(12.0)	3.4	-	橙褐色	良好	石英、角閃石、雲母	99%	No.18
6	〃	(12.8)	3.4	-	茶褐色	〃	石英、角閃石	図示30%	No.15
7	〃	(12.7)	3.5	6.1	明灰色	〃	石英、長石、片岩、黒色粒	図示45%	No.12、全面手持ちヘラ、末野
8	〃	14.0	3.8	8.3	〃	〃	石英、長石、黒色粒、骨針	図示75%	No.4、周辺回転ヘラ、火襷痕、南比企
9	〃	12.3	3.7	7.8	黒褐～灰橙色	普通	石英、長石、細礫	図示90%	No.2、周辺回転ヘラ、未還元、末野
10	〃	12.2	3.6	7.6	黄灰～黒褐色	不良	石英、長石、片岩、黒色粒、砂粒	図示95%	カマドNo.2、9、周辺回転ヘラ、磨滅、末野
11	〃	12.2	3.5	(6.8)	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示60%	No.11＋カマド覆土、周辺回転ヘラ、末野
12	〃	12.2	3.7	6.9	〃	〃	石英、長石、黒色粒	図示65%	No.3、5、周辺回転ヘラ、末野
13	〃	12.7	3.5	7.0	黄灰色	不良	石英、長石、チャート、片岩、砂粒	図示90%	カマドNo.1、周辺回転ヘラ、磨滅、末野
14	蓋	17.2	3.6	-	灰色	良好	長石、角閃石、黒色粒	図示80%	No.10、13、末野
15	甕	(17.8)	《5.5》	-	橙褐色	〃	角閃石、微砂粒	図示15%	カマド覆土
16	〃	(20.3)	《11.6》	-	〃	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示25%	No.17
17	台付甕	(13.4)	16.8	(9.8)	暗赤褐色	〃	石英、角閃石、砂粒	図示55%	No.7、8
18	甑	-	《5.7》	(19.0)	暗褐色	〃	石英、角閃石、チャート	図示20%	No.1、土師質土器(軟質)、内面ヘラミガキ



第9図　2号住居跡実測図

平面形態は円形で、直径73cm、深さ７cmを測り、底部中央に小ピットが検出された。３号土坑は、床面中央において検出された。直径69cmの浅い土坑に、長軸50cmの楕円形の土坑が重複する形態である。深さは５cmほどと浅く、中から直径13cmの焼土が出土した。

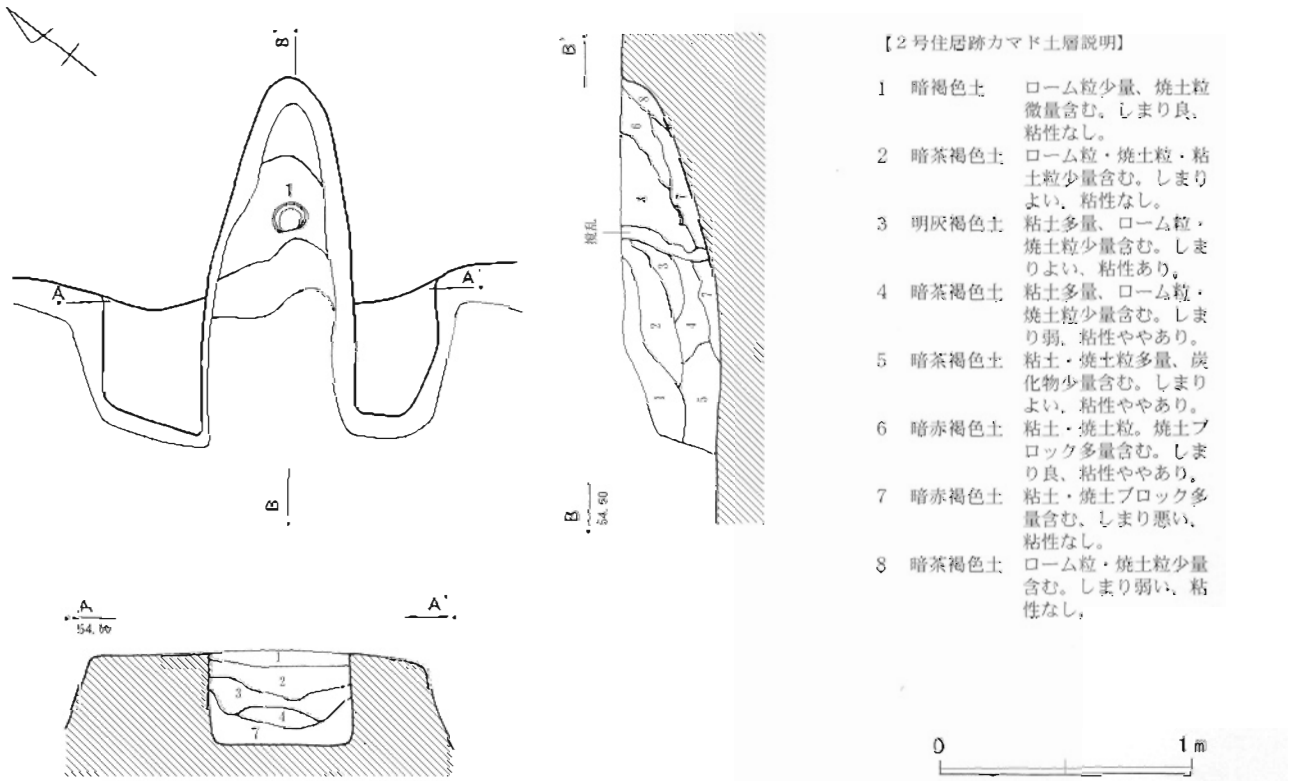
ピットは床面全体から14基が検出された。平面は円形を主体に隅丸方形を呈するものもあり、すべてが本遺構に伴うものかは定かではない。直径は21～48cm、深さは４～17cmである。

壁溝は、検出されなかった。

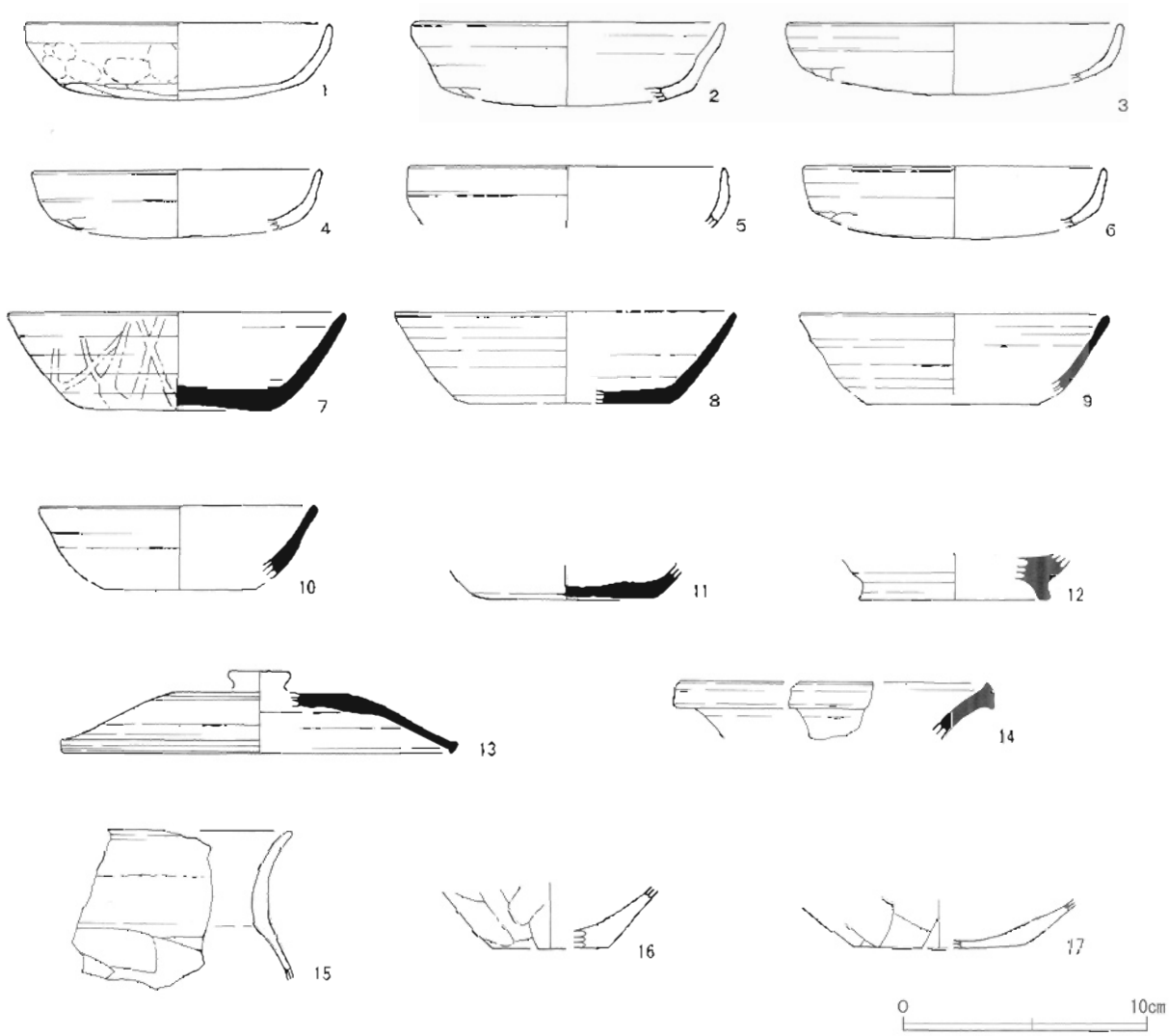
カマドは、北壁の中央を削り出し、袖は粘土を造り付けて構築されていた。右袖53cm、左袖54cmを測る。

燃焼部は、長さ141cm、最大幅51cmを測る。底部は平坦であり、煙道に向かってやや角度をもち立ち上がる。

出土した遺物は比較的少なく、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋・高台椀・長頸瓶などがある。時期は８世紀中葉から後半にかけてと考えられる。



第10図　２号住居跡カマド実測図



第11図　２号住居跡出土遺物実測図

２号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	12.4	3.2	-	橙褐色	普通	石英、雲母	90%	カマドNo.1、内外面に油脂状黒斑
2	〃	(12.7)	(3.5)	-	〃	〃	角閃石、微砂粒	図示15%	覆土
3	〃	(13.7)	(2.9)	-	〃	〃	微砂粒	図示10%	〃
4	〃	(11.8)	(2.8)	-	橙色	〃	雲母、角閃石	図示15%	〃
5	〃	(13.0)	《2.5》	-	〃	〃	石英、微砂粒	図示10%	〃
6	〃	(12.3)	(4.0)	-	赤褐色	〃	角閃石、微砂粒	図示20%	〃
7	〃	(13.7)	4.0	(7.7)	灰色	良好	石英、長石、片岩	図示45%	No.6、全面回転ヘラ、火襷痕、末野
8	〃	(14.0)	3.8	(8.6)	灰白色	やや悪	石英、チャート、黒色粒、微砂粒	図示30%	No.5、7、全面回転ヘラ、末野
9	〃	(12.6)	《3.3》	-	茶褐色	良好	石英、微砂粒、骨針	図示20%	覆土、末還元、南比企
10	〃	(11.3)	《3.1》	-	明灰色	〃	石英、白色粒、黒色粒	図示15%	覆土、南比企?
11	〃	-	《1.5》	(7.5)	〃	〃	長石、片岩	図示20%	覆土、回転糸切り未調整、末野
12	高台椀	-	《2.0》	(7.8)	〃	普通	石英、白色粒、黒色粒	図示10%	覆土、末野
13	蓋	(16.0)	《2.5》	-	灰色	〃	石英、長石、片岩	図示25%	カマド袖、末野
14	長頸瓶	(12.6)	《2.4》	-	黄灰色	やや悪	微砂粒	図示８%	覆土、産地不明
15	甕	-	-	-	暗赤褐色	普通	砂粒	破片	覆土
16	〃	-	《2.6》	(4.3)	〃	〃	砂粒、酸化鉄粒	図示20%	〃
17	〃	-	《2.0》	(7.0)	茶褐色	〃	角閃石、微砂粒	〃	カマド覆土

3号竪穴住居跡

調査区の中央やや東寄りに位置する。

遺構の大半が調査区域外にあり、検出できたのは北コーナー部の1m弱の範囲である。よって、規模・主軸方位等は不明である。平面形態は、方形になるのであろうか。

床面は多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。壁はやや角度をもって掘り込まれ、確認面からの深さは約18cmを測る。

カマド・壁溝・柱穴等については、不明である。

遺物は、図示できたのが須恵器の坏1点である。

4号竪穴住居跡

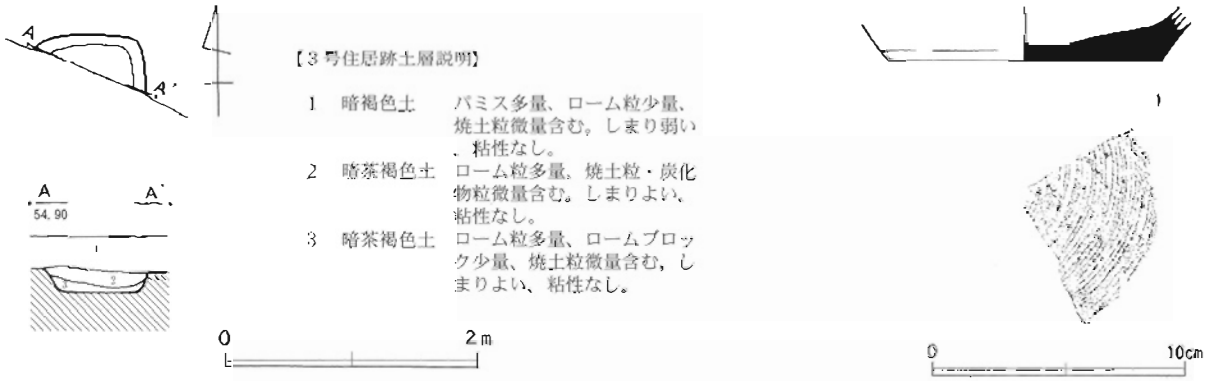
調査区の東寄りに位置する。

遺構の大半が調査区域外にあり、規模・主軸方位等は不明である。検出できたのは北コーナーの一部であり、3号住居跡と同様な様相を示す。

床面は多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。壁はやや角度をもって掘り込まれ、確認面からの深さは約31cmを測る。

カマドや壁溝・ピットについては、不明である。

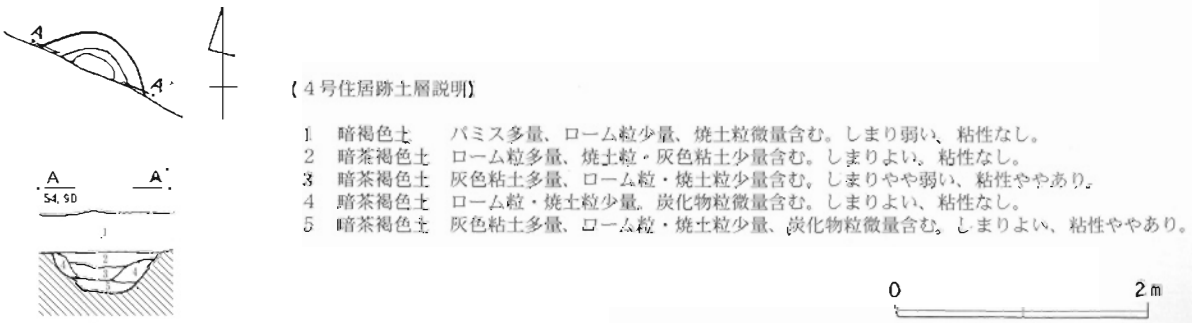
出土遺物は、土師器の坏・甑などの小破片がある。時期は9世紀前半であろうか。



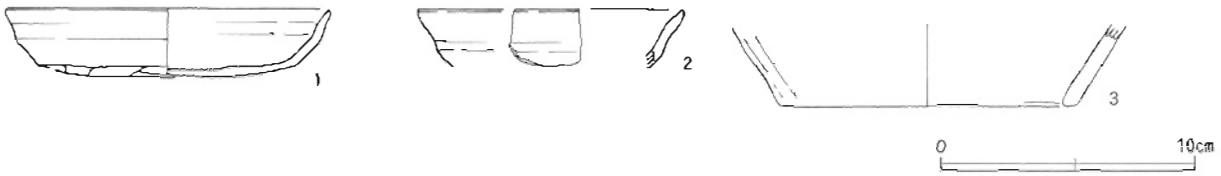
第12図　3号住居跡及び出土遺物実測図

3号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	-	《1.5》	(7.0)	灰色	良好	石英、長石、片岩	図示25%	覆土、回転糸切り未調整、末野



第13図　4号住居跡実測図



第14図　４号住居跡出土遺物実測図

４号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(12.8)	2.7	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石	図示35%	覆土
2	〃	(10.4)	《2.3》	-	赤褐色	〃	石英、微砂粒	図示７%	〃
3	甑	-	《3.3》	(11.8)	灰褐色	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	〃

５号竪穴住居跡

調査区の南東コーナー付近に位置する。６号住居跡・４号土坑と重複し、切り合い関係から本遺構が最も古いことが判明している。

南半部が調査区域外にあるため、規模等は不明である。平面形態は、正方形あるいは長方形を呈すると考えられる。東西軸で5.38mを測り、南北軸は2.55m以上となる。主軸方位は、N-102°-Eを示す。

壁はやや角度をもって掘り込まれ、床面は平坦である。確認面からの深さは、40cm前後を測る。

ピットは、床面中央と北壁沿いで検出された。後者は、複数のピットが弧を描きながら溝状に連なっている。

壁溝は、北壁から東壁にかけて検出された。幅は24cm、床面からの深さは５cmほどである。

カマドは、東壁を削り出し構築されていた。袖は粘土の造り付けで、長さは右袖で55cm、左袖で58cmを測る。

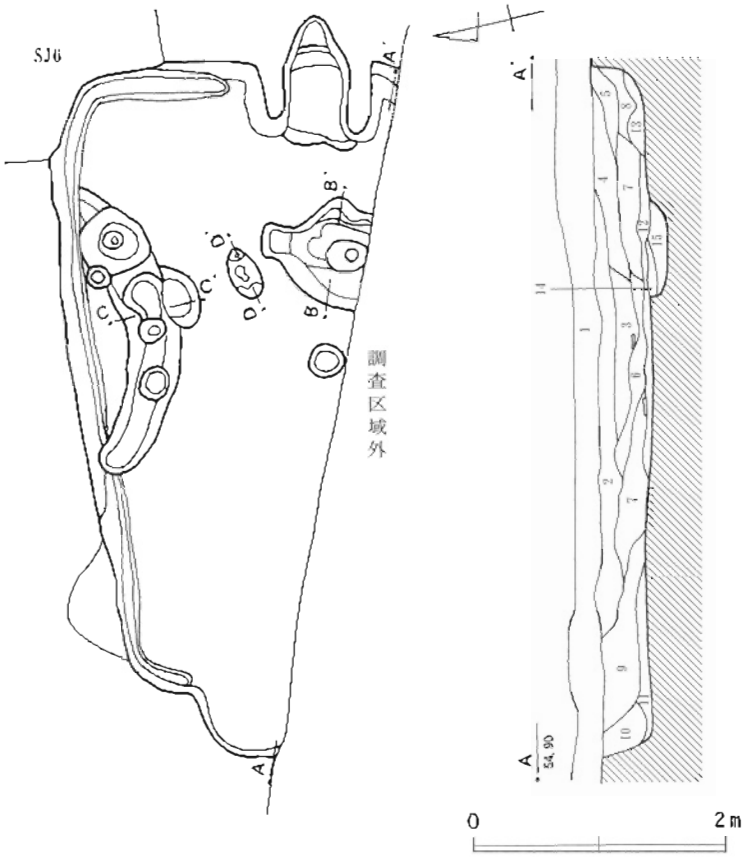
燃焼部は、長さ103cm、最大幅42cmを測る。底面は浅く窪み、煙道に向かい角度を持って立ち上がる。

鍛冶炉が、床面中央の東寄りから検出された。平面形体は楕円形を呈し、長軸43cm、短軸23cm、深さ４cmを測る。長軸の両端が被熱のため焼土化していた。内部から遺物は検出されなかったが、後述する鍛冶関連遺物などから小鍛冶炉と想定される。

また、鍛冶炉の南には径80cm以上を測る土坑が検出された。深さは25cmほどであるが、覆土中から焼土ブロックや炭化物が出土している。

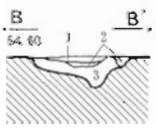
遺構全体の出土遺物は、覆土およびカマド内から土師器の坏・皿・甕・台付甕・鉢、須恵器の坏・蓋・高台椀・長頸瓶・甕などが出土した。さらに鉄製の鉤・刀子・釘、羽口、椀形滓、鉄滓、磨石なども検出した。

出土した土器から、８世紀後半から９世紀前半にかけての時期と考えられる。



【5号住居跡A－A' 土層説明】

1	暗褐色土	ローム粒少量、焼土粒微量含む。しまり良、粘性なし。
2	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・粘土粒少量含む。しまりよい、粘性なし。
3	明灰褐色土	粘土多量、ローム粒・焼土粒少量含む。しまりよい、粘性あり。
4	暗茶褐色土	粘土多量、ローム粒・焼土粒少量含む。しまり弱、粘性ややあり。
5	暗茶褐色土	粘土・焼土粒多量、炭化物少量含む。しまりよい、粘性ややあり。
6	暗赤褐色土	粘土・焼土粒。焼土ブロック多量含む。しまり良、粘性ややあり。
7	暗赤褐色土	粘土・焼土ブロック多量含む。しまり悪い、粘性なし。
8	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒少量含む。しまり弱い、粘性なし。
9	暗茶褐色土	ローム粒少量、焼土粒微量含む。しまり良い、粘性なし。
10	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・ロームブロック・灰色粘土ブロック少量含む。しまり良い、粘性なし。
11	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・灰色粘土ブロックを少量含む。
12	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・灰色粘土粒少量含む。しまり良い、粘性なし。
13	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・灰色粘土少量含む。しまり良い、粘性やや有。
14	茶褐色土	ロームブロック・焼土粒・炭化物粒・灰色粘土を少量含む。しまり良い、粘性ややあり。
15	暗茶褐色土	ロームブロック多量、焼土粒・炭化物粒を微量含む。しまりやや弱い、粘性なし。



【5号住居跡B－B' 土層説明】

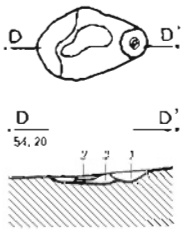
1	黒褐色土	炭化物多量、焼土粒・灰色粘土少量含む。しまり良、粘性なし。
2	暗茶褐色土	焼土ブロック多量、炭化物粒・灰色粘土粒少量含む。しまりやや弱い、粘性ややあり。
3	暗茶褐色土	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物・灰色粘土少量含む。しまりやや弱い、粘性なし。

0　2m

【5号住居跡C－C' 土層説明】

1　暗茶褐色土　ローム粒多量、焼土粒・炭化物少量含む。しまり良、粘性なし。

0　2m

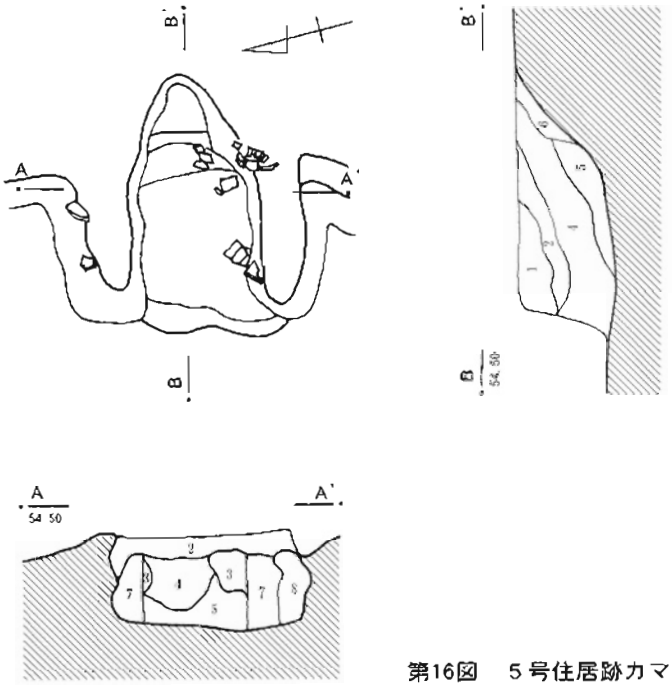


【5号住居跡鍛冶炉D－D' 土層説明】

1	暗茶褐色土	ローム粒多量、焼土粒・炭化物粒少量含む。しまりよい、粘性なし。
2	明黒褐色土	焼土粒・炭化物粒多量、ローム粒少量含む。しまり弱い、粘性なし。
3	赤褐色土	焼土層。しまり強い、粘性なし。

0　1m

第15図　5号住居跡実測図

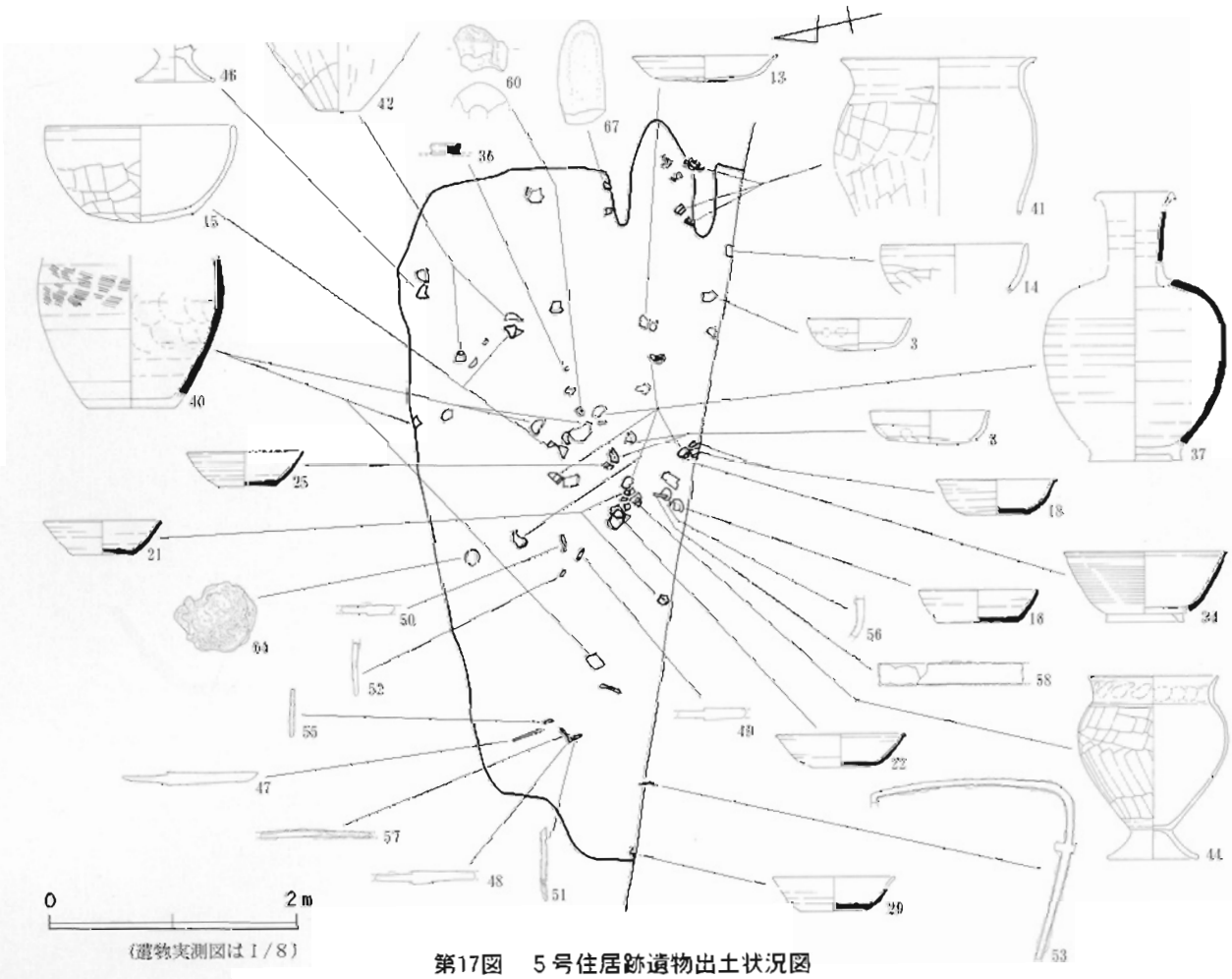


【5号住居跡カマド土層説明】

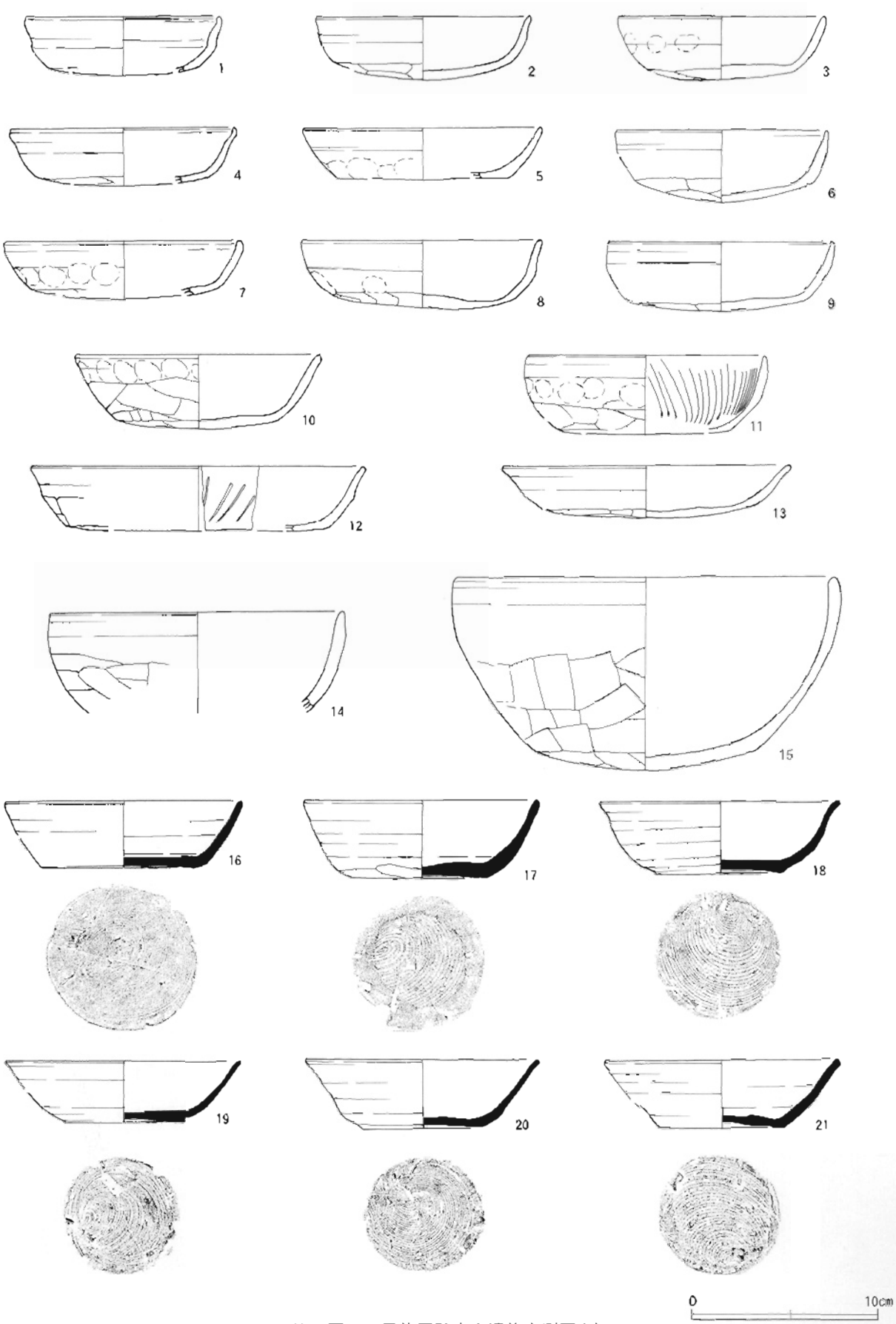
1	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・焼土ブロック・炭化物少量含む。しまり良、粘性なし。
2	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物少量含む。しまりよい、粘性なし。
3	暗灰褐色土	灰色粘土多量、焼土粒少量含む。しまりよい、粘性あり。
4	暗茶褐色土	焼土粒多量、ローム粒・炭化物・灰色粘土少量含む。しまりよい、粘性なし。
5	暗赤褐色土	焼土粒・焼土ブロック多量、ロームブロック少量含む。しまりやや弱い、粘性なし。
6	暗赤褐色土	ローム粒・焼土粒・焼土ブロック・炭化物少量含む。しまり良、粘性ややあり。
7	赤灰褐色土	灰色粘土主体。部分的に焼土化。しまりよい、粘性あり。
8	淡灰褐色土	灰色粘土主体。ローム粒を少量含む。しまりよい、粘性あり。

0 1m

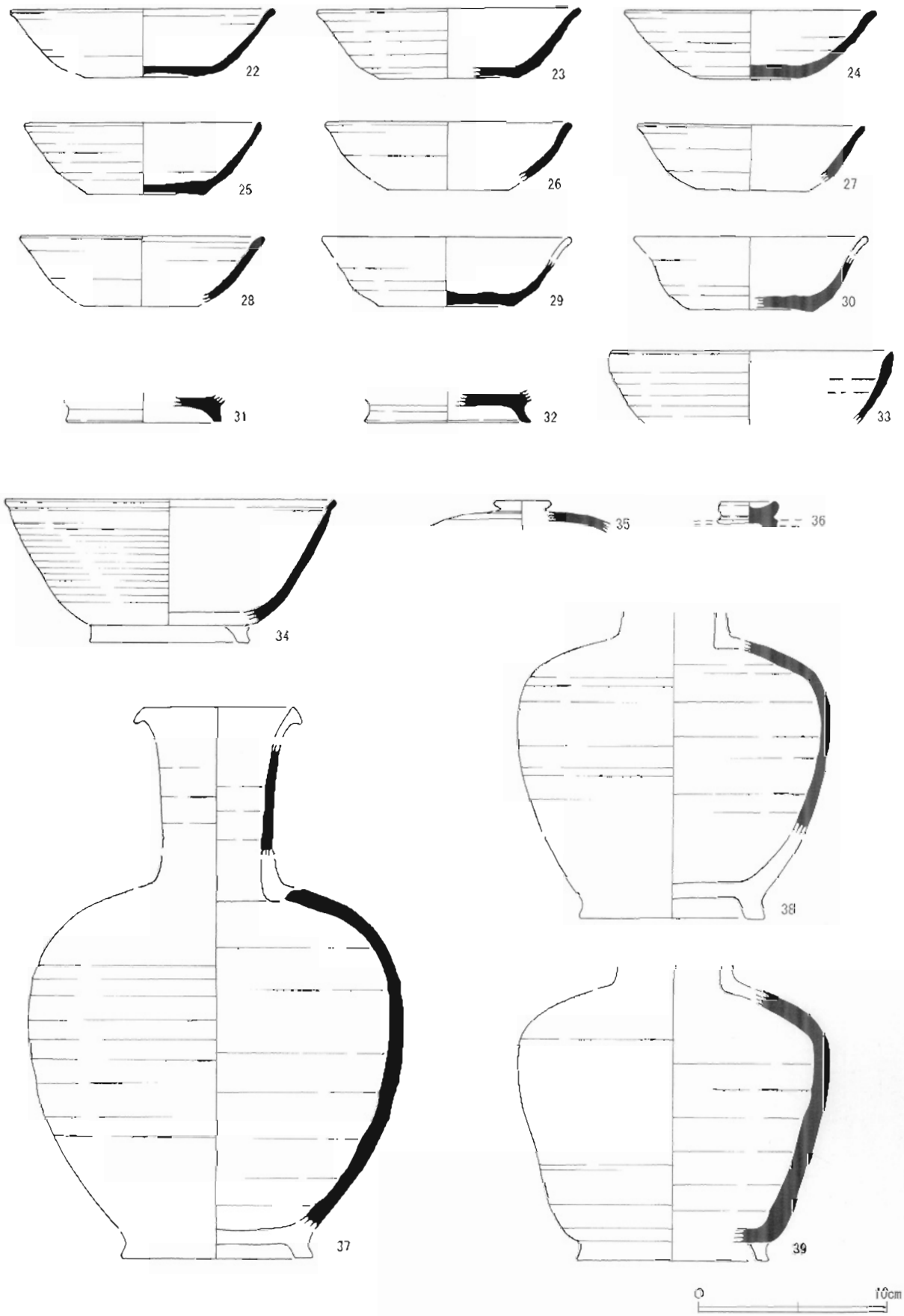
第16図　5号住居跡カマド実測図



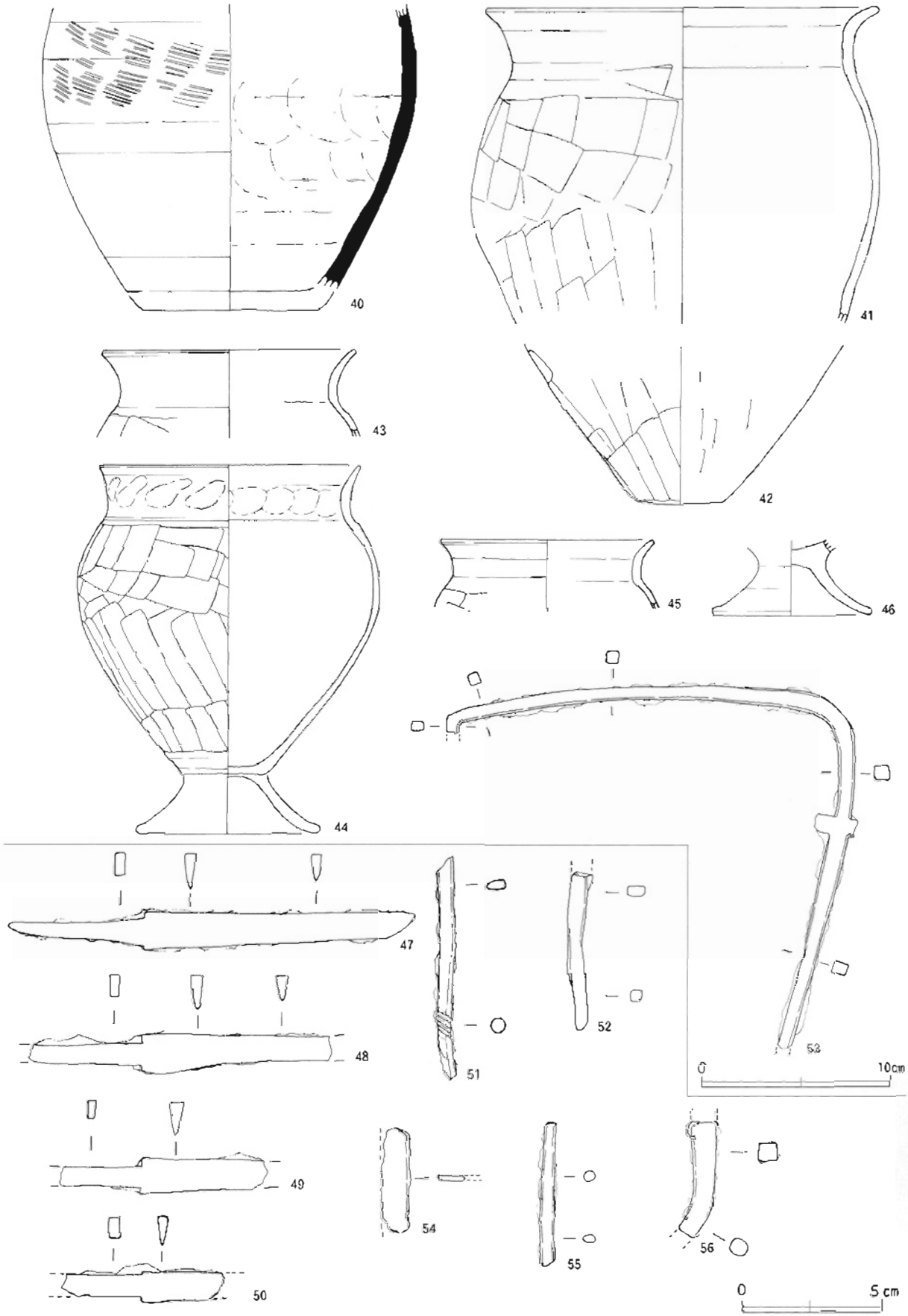
第17図　5号住居跡遺物出土状況図



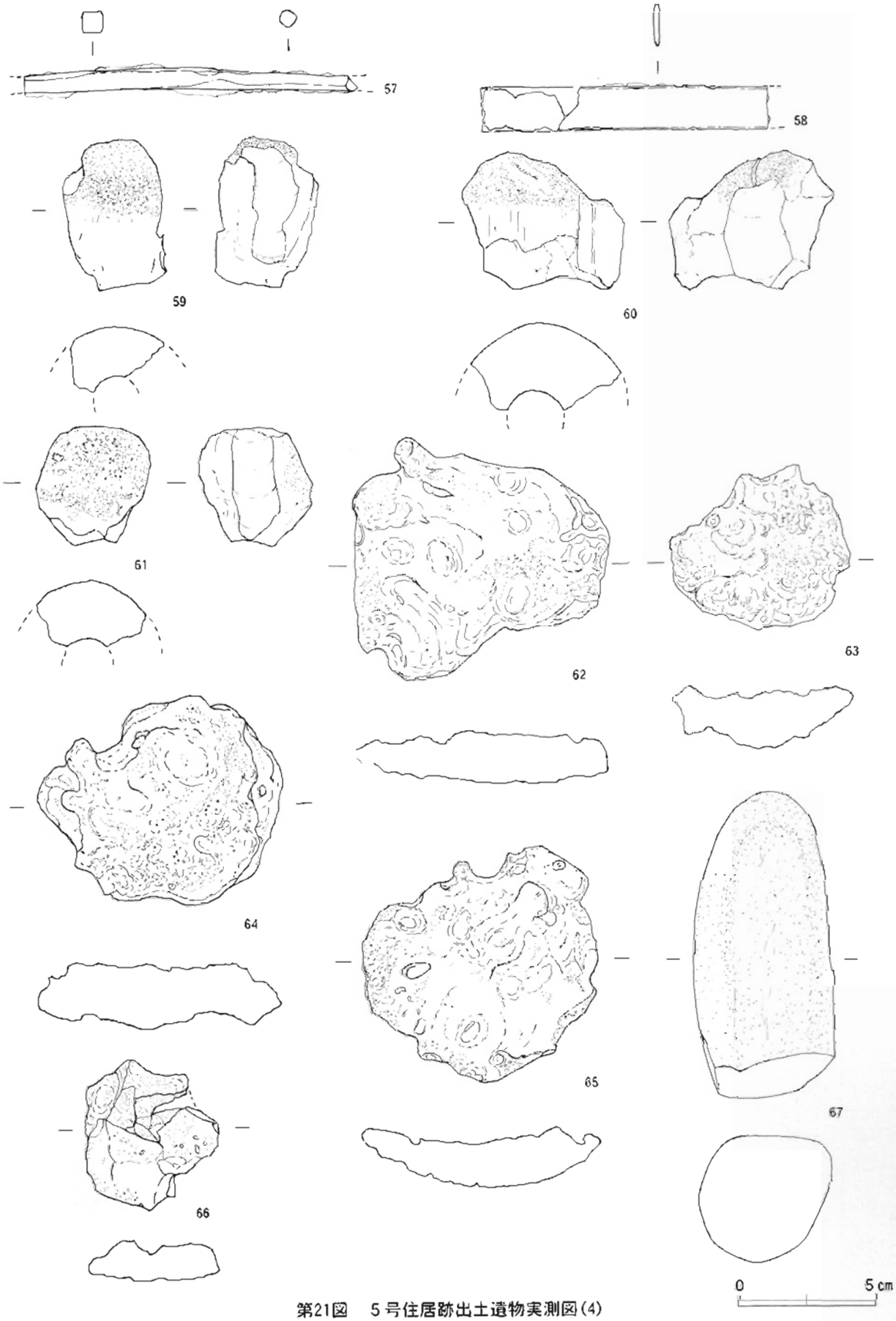
第18図　5号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図　5号住居跡出土遺物実測図(2)



第20図　5号住居跡出土遺物実測図(3)



第21図　5号住居跡出土遺物実測図(4)

5号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	(10.4)	(3.2)	-	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土、磨滅あり
2	〃	(11.4)	3.4	-	灰褐色	やや悪	石英、角閃石	図示45%	覆土
3	〃	(11.0)	3.4	-	橙褐色	普通	石英、角閃石	図示60%	No.45
4	〃	(11.9)	(3.1)	(9.3)	灰橙褐色	〃	石英、角閃石、パミス	図示20%	覆土
5	〃	(12.7)	(2.7)	(9.1)	明橙褐色	〃	石英、角閃石、砂粒	図示25%	〃
6	〃	(11.2)	3.8	-	〃	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示60%	〃
7	〃	(12.4)	(3.1)	(10.0)	暗赤褐色	〃	石英、角閃石	図示40%	〃
8	〃	12.7	3.6	-	橙褐色	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示80%	No.30、31
9	〃	12.0	3.7	-	赤褐色	〃	石英、角閃石	図示60%	覆土
10	〃	(13.6)	3.9	(8.7)	暗赤褐色	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示50%	覆土、内面に油脂状黒斑
11	〃	12.6	(4.2)	(8.9)	〃	〃	微砂粒	図示50%	覆土、カマド覆土、内面放射状暗文
12	〃	(17.8)	3.5	(14.0)	橙褐色	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示５%	覆土、内面放射状暗文
13	皿	(15.3)	2.8	-	暗橙褐色	〃	石英、角閃石	図示50%	No.43
14	鉢	(15.6)	《5.4》	-	橙褐色	〃	石英、角閃石、チャート、砂粒	図示20%	No.46
15	〃	(20.2)	10.2	(11.7)	〃	〃	石英、角閃石	図示40%	No.34、60
16	坏	(12.5)	3.6	8.0	明灰色	良好	微砂粒、骨針	図示70%	No.25、全面回転ヘラ、南比企
17	〃	(12.5)	4.2	7.6	暗茶褐色	やや悪	石英、微砂粒	図示40%	覆土、周辺回転ヘラ、末野?
18	〃	12.8	3.9	6.7	灰褐色	〃	石英、長石、チャート、片岩	図示80%	No.26、29、回転糸切り未調整、末野
19	〃	(12.3)	6.2	3.3	黒灰褐色	不良	石英、片岩、雲母、微砂粒	図示70%	覆土、回転糸切り未調整、末野
20	〃	12.3	3.7	6.4	灰色	良好	石英、長石、片岩、黒色粒	図示80%	覆土、回転糸切り未調整、末野
21	〃	(12.4)	3.7	6.4	〃	〃	石英、長石、片岩、(粗い)	図示50%	No.10、19、回転糸切り未調整、末野
22	〃	(13.6)	3.6	5.8	明灰褐色	不良	石英、長石、チャート、赤色粒	図示25%	No.18、回転糸切り未調整、末野?
23	〃	(13.5)	3.7	(7.1)	灰白色	やや悪	石英、チャート、片岩	図示20%	覆土、回転糸切り未調整、末野
24	〃	(13.1)	3.6	6.4	赤褐色	〃	石英、長石、赤色粒	図示40%	覆土、回転糸切り未調整、末野、未還元
25	〃	(12.2)	3.8	6.0	灰色	良好	石英、長石	図示30%	No.32、回転糸切り未調整、末野
26	〃	(12.7)	《3.1》	-	灰白色	〃	チャート、黒色粒、骨針	図示25%	覆土＋6住覆土、南比企
27	〃	(11.7)	《3.0》	-	明灰色	〃	石英、長石、骨針、(堅緻)	図示20%	覆土、南比企
28	〃	(12.7)	(3.7)	(5.8)	灰白色	〃	チャート、微砂粒、骨針	図示10%	覆土、南比企
29	〃	-	《2.5》	(7.0)	茶褐色	普通	石英、片岩、微砂粒	図示20%	No.1、回転糸切り未調整、末野
30	〃	-	《2.9》	(6.6)	灰褐色	〃	石英、長石、チャート、片岩	図示25%	覆土、回転糸切り未調整、末野
31	高台椀	-	《1.5》	(8.1)	黄灰色	やや悪	石英、片岩	図示20%	覆土、末野、磨滅あり
32	〃	-	《1.7》	(8.5)	〃	不良	石英、長石、酸化鉄粒	図示10%	覆土、末野
33	〃	(14.7)	《4.0》	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示25%	覆土、末野
34	〃	(17.2)	《6.5》	-	淡黄灰色	普通	石英、長石、片岩、パミス	図示20%	No.27、末野
35	蓋	-	《1.2》	-	暗灰色	良好	石英、長石、骨針	図示15%	覆土、南比企
36	〃	-	《1.4》	-	明灰色	〃	石英、長石、チャート	図示99%	No.40、末野?
37	長頸瓶	-	《25.7》	-	灰黒色	〃	石英、長石、黒色粒、骨針	図示50%	No.14、16他、自然釉、南比企
38	〃	-	《10.3》	-	明灰色	〃	石英、長石、(堅緻)	図示15%	覆土、南比企
39	〃	-	《13.3》	(10.1)	〃	やや悪	石英、長石、黒色粒、赤色粒	図示20%	覆土、末野
40	甕	-	《15.4》	-	〃	良好	石英、チャート、長石、骨針	図示60%	No.9、35他、外面平行叩き＋ナデ、南比企
41	〃	20.7	《12.0》	-	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示60%	カマドNo.4、5他
42	〃	-	《8.5》	4.8	暗赤褐色	〃	石英、角閃石、砂粒	図示60%	No.48、52
43	台付甕	(13.3)	《4.8》	-	暗褐色	やや悪	石英、角閃石、砂粒	図示25%	覆土
44	〃	(13.8)	《16.3》	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示50%	No.20、28
45	〃	(11.1)	《3.8》	-	〃	〃	石英、角閃石	図示20%	覆土
46	〃	-	《4.0》	8.2	赤褐色	〃	石英、角閃石、雲母	図示90%	No.11
47	刀子	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			99%	No.4
		14.5	1.3	0.4	16.0				
48	〃	《10.8》	1.4	0.4	10.9			70%	No.3、茎部先端と刃部先端欠損
49	〃	《7.3》	1.3	0.4	8.0			50%	No.12、　〃
50	〃	《5.7》	1.1	0.4	6.5			40%	No.13、　〃
51	不明	《8.0》	0.6	0.4	6.6			-	No.58、細い棒状で一部捻れあり。鉄鏃?
52	鉄釘?	《5.7》	0.6	0.4	3.9			-	No.55、細い角棒状、やや曲る
53	クルル鉤	解錠部	軸部(cm)	柄部(cm)	太さ(cm)	重さ(g)		90%	No.2、先端と柄部先一部欠損、亀裂あり
		20.7	6.0	《12.5》	0.5～1.0	110.3			
54	不明	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			破片	溝内、薄板状で表面平坦、銅製
		《3.7》	《1.1》	0.2	2.7				
55	〃	《5.1》	0.5	0.4	2.2			-	No.5、細い棒状
56	鉄釘?	《4.1》	0.9	0.7	7.6			破片	No.24、断面方形で棒状
57	不明	《12.0》	0.8	0.8	25.2			〃	No.59、断面方形で棒状、亀裂あり、鉤?
58	〃	《10.4》	1.6	0.2	12.8			〃	No.22、薄板状で長方形、層状剥離
59	羽口	《5.5》	3.8	1.8	34.3		砂粒、スサ	〃	覆土、先端部発泡、外面ヘラケズリ
60	〃	《4.9》	《5.4》	2.4	56.1		〃	〃	No.38、先端部発泡、外面ヘラナデ
61	〃	《4.3》	《3.9》	2.0	31.0		〃	〃	覆土、先端部発泡
62	椀形滓	8.8	9.3	1.9	165.7			100%	覆土、表面粒状突起と気泡、磁着度(弱)
63	〃	6.0	6.5	2.1	84.8			〃	覆土、表面細かな気泡と凹凸、磁着度(中)
64	〃	7.5	8.8	2.4	210.0			〃	No.15、上面平坦、下面流動状、磁着度(弱)
65	〃	8.5	8.5	1.8	111.0			〃	覆土、周縁発泡、下面砂付着、磁着度(弱)
66	鉄塊系	5.5	4.8	1.4	62.7			破片	覆土、発泡少なく緻密、亀裂、磁着度(強)
67	磨石・砥石	11.1	5.1	4.4	394.0			80%	カマドNo.1、3ヶ所の磨り面、河原礫(砂岩)

６号竪穴住居跡

調査区の東端に位置する。５号住居跡と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが判明している。

長軸3.08m、短軸2.52mを測り、東西にやや長い長方形を呈する。主軸方位は、N-95°-Eを示す。

壁はやや角度をもって掘り込まれ、床面は平坦である。確認面からの深さは、20cm前後を測る。

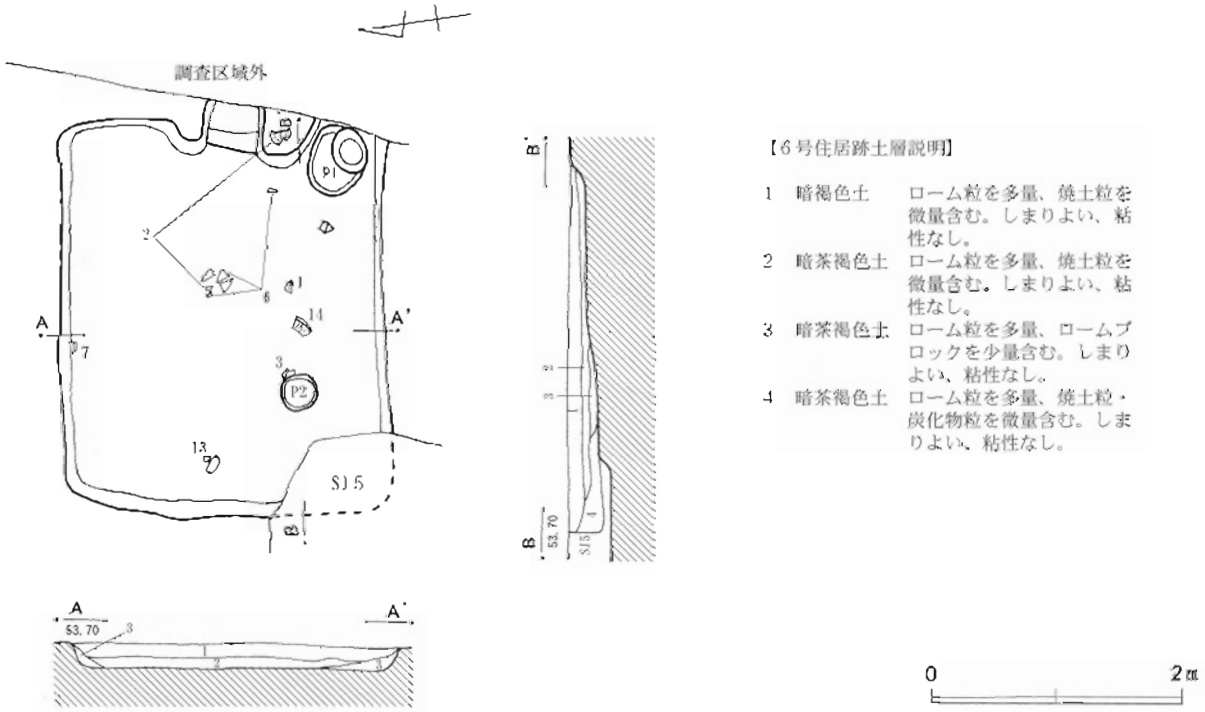
柱穴は２基が検出され、平面形態はいずれも円形である。ピット１はカマド右袖付近で検出され、直径50cm、床面からの深さは23cmを測る。ピット２は南西コーナー付近で検出され、直径29cm、床面からの深さは10cmを測る。

壁溝は検出されなかった。

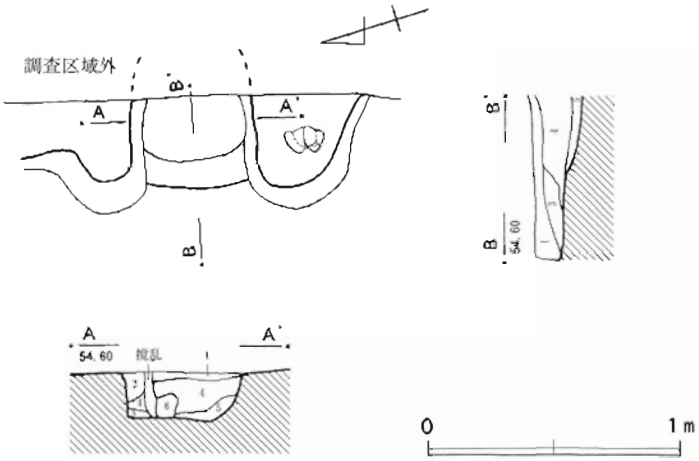
カマドは東壁のほぼ中央を削り出し、袖は粘土を造り付けて構築されていた。右袖は長さ42cm、左袖は26cmを測る。

燃焼部については、先端が調査区域外にあるため、全長は不明である。最大幅は、40cmである。底部は、床面より６cmほど掘り窪められていた。

出土遺物は比較的少なく、南東コーナー付近やカマド内から土師器の坏・甕・台付甕、須恵器の坏・蓋・鉢・甕、砥石などが出土した。時期は９世紀後半と考えられる。



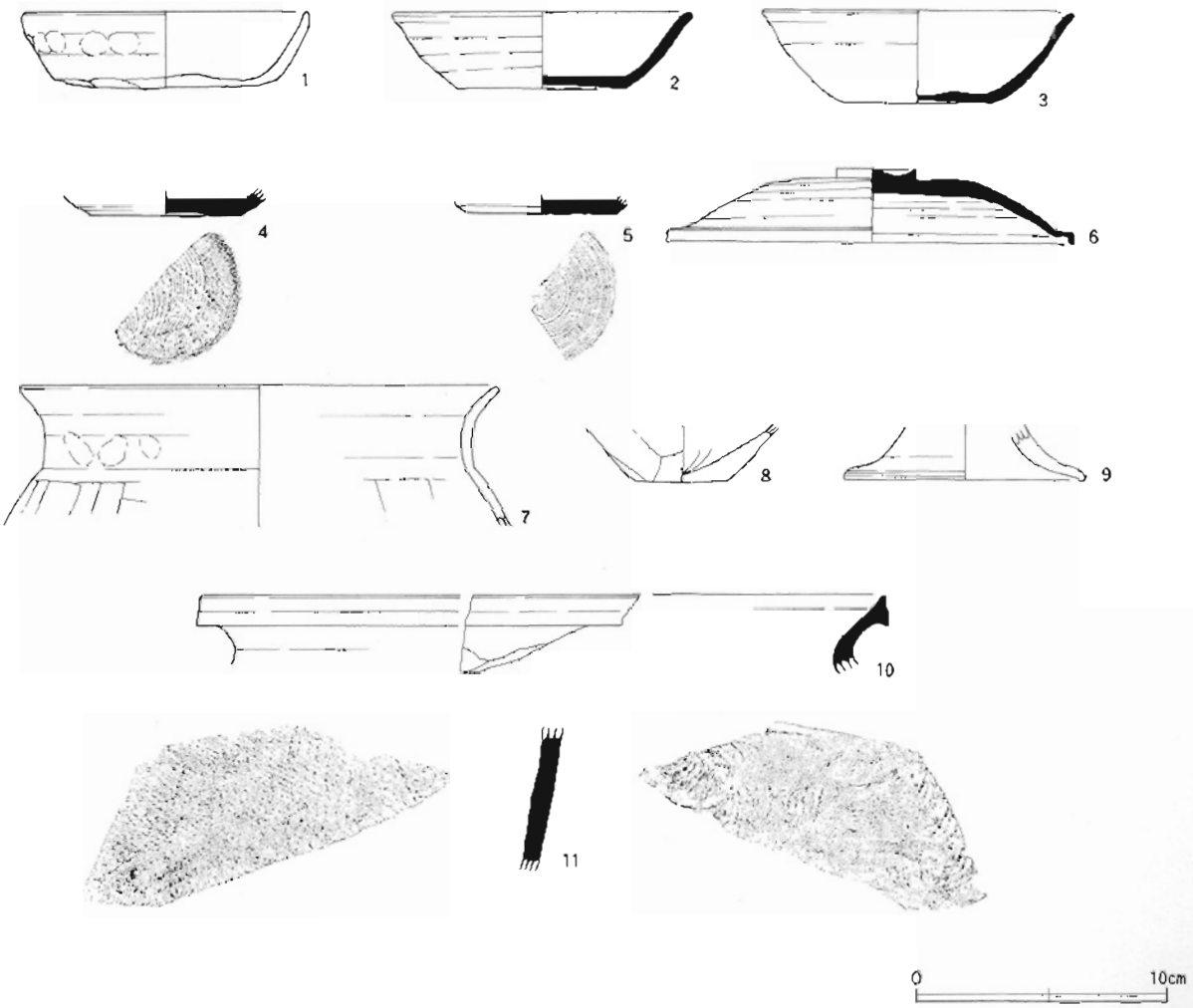
第22図　６号住居跡実測図



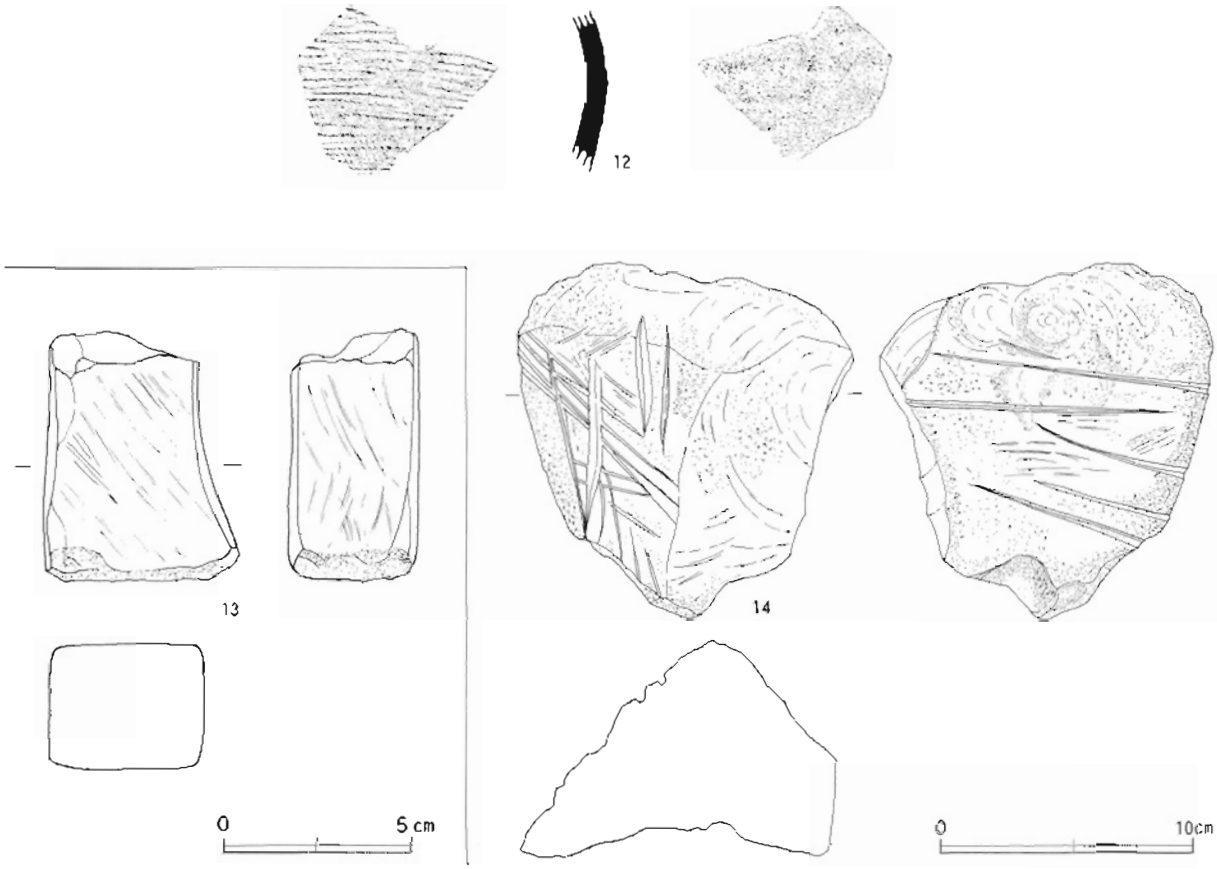
【6号住居跡カマド土層説明】

1	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒少量含む。しまりやや弱い、粘性なし。
2	暗灰褐色土	灰色粘土多量、ローム粒・焼土粒少量含む。しまりよい、粘性あり。
3	明茶褐色土	ローム粒少量、焼土粒微量含む。しまりやや弱い、粘性なし。
4	暗茶褐色土	ローム粒・焼土粒・焼土ブロック・炭化物少量含む。しまりよい、粘性なし。
5	暗茶褐色土	ローム粒多量、焼土粒少量、炭化物粒微量含む。しまりやや弱い、粘性ややあり。
6	暗茶褐色土	ローム粒・焼土ブロック少量含む。しまり良、粘性なし。

第23図　6号住居跡カマド実測図



第24図　6号住居跡出土遺物実測図(1)



第25図　6号住居跡出土遺物実測図(2)

6号住居跡出土遺物観察表

No.	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　調	焼成	胎　　土	残存率	備　　考
1	坏	12.0	3.3	9.4	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示70%	No.5、歪みあり
2	〃	12.5	3.3	7.0	灰褐色	不良	石英、長石、片岩、砂粒、酸化鉄粒	図示95%	カマドNo.1、7、回転糸切り未調整、末野
3	〃	(13.1)	3.9	(6.0)	〃	やや悪	石英、長石、チャート	図示45%	No.3、回転糸切り未調整、末野
4	〃	-	《1.2》	(6.4)	明灰色	普通	石英、長石、骨針	図示45%	覆土、周辺回転ヘラケズリ、南比企
5	〃	-	《0.8》	(6.3)	〃	良好	石英、骨針	図示30%	覆土、全面回転ヘラケズリ、南比企
6	蓋	17.3	3.2	-	明橙褐色	普通	石英、チャート、片岩、砂粒	図示80%	No.6、7、9、末野
7	甕	(20.1)	《6.8》	-	橙褐色	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	No.10
8	〃	-	《2.5》	(4.0)	〃	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示35%	覆土
9	台付甕	-	《2.3》	(10.1)	〃	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土
10	鉢	(29.0)	《3.4》	-	明灰色	〃	石英、チャート、長石、黒色粒	図示7%	覆土、末野
11	甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行+ナデ、内面青海波、末野
12	〃	-	-	-	〃	普通	石英、長石、片岩	〃	覆土、外面平行、内面ナデ、末野
13	砥石	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材		50%	No.1、砥ぎ面は4面、端部に敲打痕
		6.6	5.1	3.5	165.3	凝灰岩			
14	〃	14.0	13.2	7.5	582.1	軽石		90%	No.4、切り込み状の砥ぎ跡

1号掘立柱建物跡

調査区の東寄りに位置する。

北部が調査区域外に延びているため全容は不明である。3間×2間以上の側柱建物と考えられ、建物の西側内に一回り小さなピット3基（P8～P10）が桁柱にほぼ平行する形で検出された。ただし、これらは柱筋が若干ずれており、どのような構造となるかは不明である。

主軸方位は、N-93°-Eを示す。

まず側柱であるが、柱間は桁行と梁行共に約1.6m（5尺）を基本とするが、P4とP5の間隔だけが2.1mと長い。また、柱穴は、いずれも円形を呈し、直径29～54cm、深さ43cmを測る。

次にP8～P10は、側柱に比べて柱穴が一回り小さく直径21～29cm、深さは22～36cmである。柱間は約1.5mを測る。

遺物は、出土しなかった。しかしながら、柱穴埋土の状態や、柱筋のやや不揃いな点から、時期は中世以降と考えられる。

1号土坑

調査区の西寄りに位置する。

平面形態は隅丸方形を呈し、長軸159cm、短軸92cmを測る。主軸方位は、N-80°-Eを示す。

底面は、ほぼ平坦である。壁は垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは26cmを測る。

出土した遺物は、須恵器の坏と蓋がある。

2号土坑

調査区中央の北寄りに位置する。

平面形態は長方形を呈し、長軸134cm、短軸53cmを測る。主軸方位は、N-60°-Wを示す。

底面は、ほぼ平坦である。壁は垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは20cmを測る。

遺物は、出土しなかった。

3号土坑

調査区の西寄りで、1号住居跡カマドの南脇に位置する。

平面形態は楕円形を呈し、長軸は111cm、短軸で56cmを測る。

主軸方位は、N-70°-Wを示す。

底面は、ほぼ平坦である。壁は垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは14cmを測る。

出土した遺物は、土師器坏がある。

4号土坑

調査区の南東寄りに位置する。5号住居跡と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが判明している。

平面形態は長方形を呈すると考えられるが、上記のとおり5号住居跡との重複により、規模等は不明である。検出できたのは71cm×53cmの範囲である。

底面は、ほぼ平坦である。壁は垂直に掘り込まれ、確認面からの深さは13cmを測る。

遺物は、出土しなかった。

ピット群

調査区の全体において、28基が検出された。

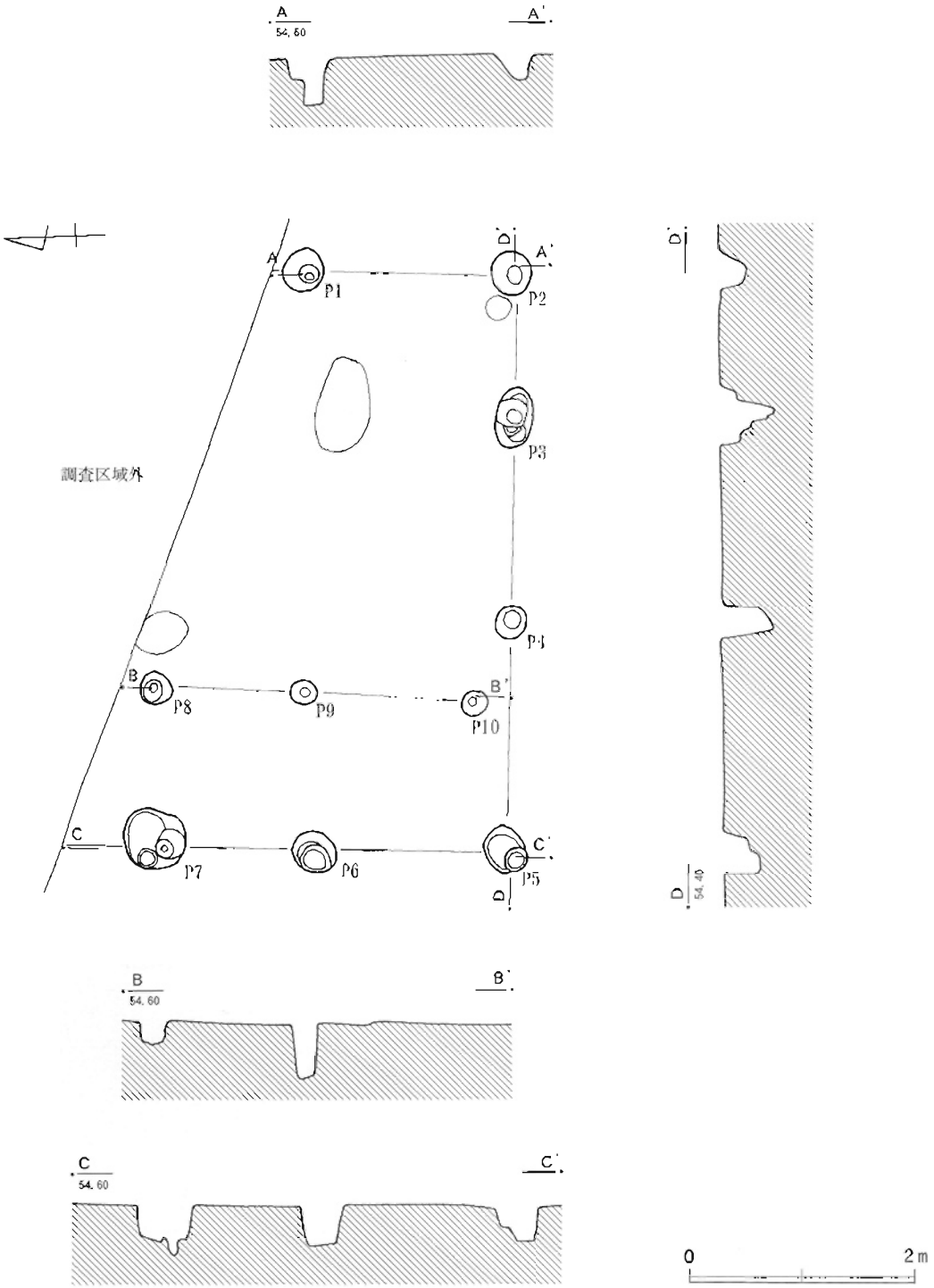
平面形態は、いずれも円形を基本とする。

最大のものは直径65cm、深さ6.2cmを測る。一方、最小のものは直径26cm、深さ19cmを測る。

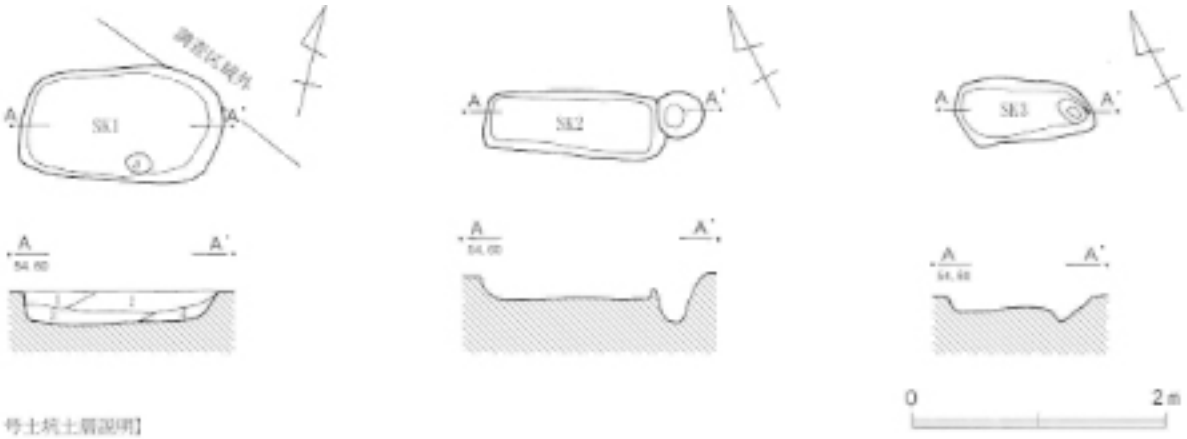
いずれのピットも、建物等の配列は判明しなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器などが柱穴埋土から小量出土したが、いずれも小破片である。図示できうる須恵器坏2点を掲載した。

これらはいずれも混入と考えられ、時期の確定は困難であるが、覆土等の状況などにより、古代から中・近世に至るまで様々であると考えられる。



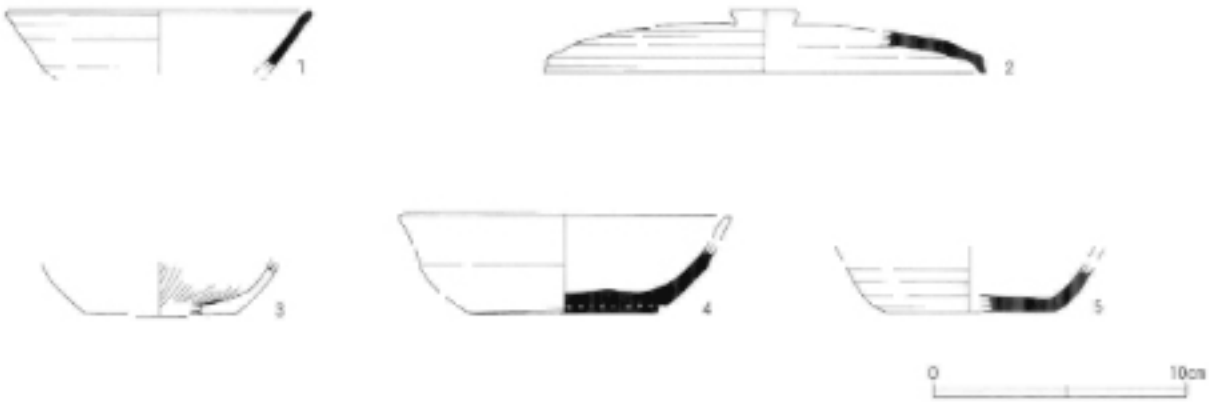
第26図　1号掘立柱建物跡実測図



【1号土坑土層説明】

1　暗茶褐色土　ローム粒多量，ロームブロック少量含む。しまりよい，粘性なし。
2　暗褐色土　ローム粒少量，ロームブロック・焼土粒微量含む。しまりよい，粘性なし。
3　暗茶褐色土　ローム粒多量，焼土粒微量含む。しまりよい，粘性なし。
4　暗茶褐色土　ローム粒・ロームブロック多量含む。しまりやや弱い，粘性なし。

第27図　1～3号土坑実測図



第28図　土坑及びピット出土遺物実測図

土坑及びピット出土遺物観察表

No.	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	(12.0)	(2.5)	-	灰色	普通	長石，黒色粒	図示10%	SK-1 覆土，米野
2	蓋	(17.4)	(1.8)	-	明灰色	〃	石英，長石，黒色粒	図示10%	SK-1 覆土，米野
3	坏	-	(2.4)	(6.0)	赤褐色	良好	微砂粒	図示10%	SK-3 覆土，内面放射状暗文
4	〃	-	(2.9)	7.4	黄灰色	やや悪	石英，チャート，微砂粒	図示40%	ピット1 覆土，回転糸切り未調整，末野
5	〃	-	(1.9)	(6.7)	灰色	良好	石英，長石，片岩	図示25%	ピット2 覆土，回転糸切り未調整，末野

Ⅳ　調査成果のまとめ

今回の調査では、６軒の竪穴住居跡が検出された。時期不明の２軒（３号・４号住居跡）を除くと、８世紀中葉から９世紀後半の時間幅に収まる。

特に、８世紀末葉～９世紀初頭と考えられる５号住居跡から鉄製の鉤が検出されたことが注目される。本文中でも触れたが、解錠部20.7cm、軸部6.0cm、柄部は残存値で12.5cmを測る。先端はほぼ直角に小さく折り曲げられており、合田氏の分類によれば、Ⅰ群に属するものである（合田1998）。

このように鉤の手状に折り曲げられた鉤は、『クルル鉤』と呼称され、扉に穿たれた鉤穴から鉤を挿入し、折れ曲がった先端のフックで扉の内側に取り付けられた桟（サル）を上下ないし左右に操作して閉閉するものである。

鉤を検出した５号住居跡は、床面中央部に鍛冶炉を有する竪穴遺構である。鍛冶関連遺物には、椀形滓・羽口・鉄滓がある。羽口は小破片３点の出土であるが、いずれも直径６cm前後を測る小型のものである。また、椀形滓は直径6.5～9.0cmの規模で、厚みも1.6～2.2cmと薄いものである。また、鉄滓の中には、比重の重い銑鉄とみられるものも含まれる。以上の点から、この鍛冶炉については小鍛冶炉と考えられる。

出土した鉄製品は、刀子４点・釘２点・不明品２点・そして鉤の合計９点である。しかも、住居の半分程しか調査することができなかったため、その数が更に増加することは間違いない。同じ白山遺跡の他の住居跡や隣接する熊野遺跡でも、鉄製品の出土は住居跡１軒につき多くても２～３点であり、５号住居跡の出土数は突出している。これらは小鍛冶において製作されたものとするのが妥当であろう。ただし、クルル鉤に関しては、床面からからやや浮いた箇所で縦位の状態で検出されており、この限りではない。

ところで、クルル鉤に関しては、榛沢郡の南西端に位置する北坂遺跡13号住居跡からも検出されている。鉄製鍛造品で、全長52cm、解錠部長37cmを測り、断面は長方形である。鍵爪部は「コ」字状に折り込まれており、合田氏のいうⅡ群に含まれる。柄部には、一部木質が残存しており、柄の両端に付いた金具の形状から、円筒形を呈する木製の柄であったことが想定される。柄尻金具には３個の円環が鎖状に連なっている。共伴土器から白山５号住より下る９世紀後半のものと考えられ、作りもより精巧で、遺存状態もよい。

なお、同遺跡は榛沢郡と那珂郡との境界に位置し、諏訪山丘陵の南斜面に立地する。検出された遺構は、総柱建物群を伴う竪穴住居跡で構成され、「中」の字の焼印や円面硯・銅鈴などを出土したことから、那珂郡と関係のある官人層の居宅と考えられてきた（中島1981）。また、『延喜式』記載の「武蔵国榎前馬牧」が那珂郡に置かれたとされることから、坂本和俊氏は牧に関連した施設としている（坂本1999）。

このことは、古代における鍵が出土した遺跡には、官衙関連遺跡が相当数含まれるとした合田氏の研究成果にも合致するものであろう。なお、官衙遺跡以外にも、寺院関連遺跡や官人の居宅・荘園などが考えられるという。

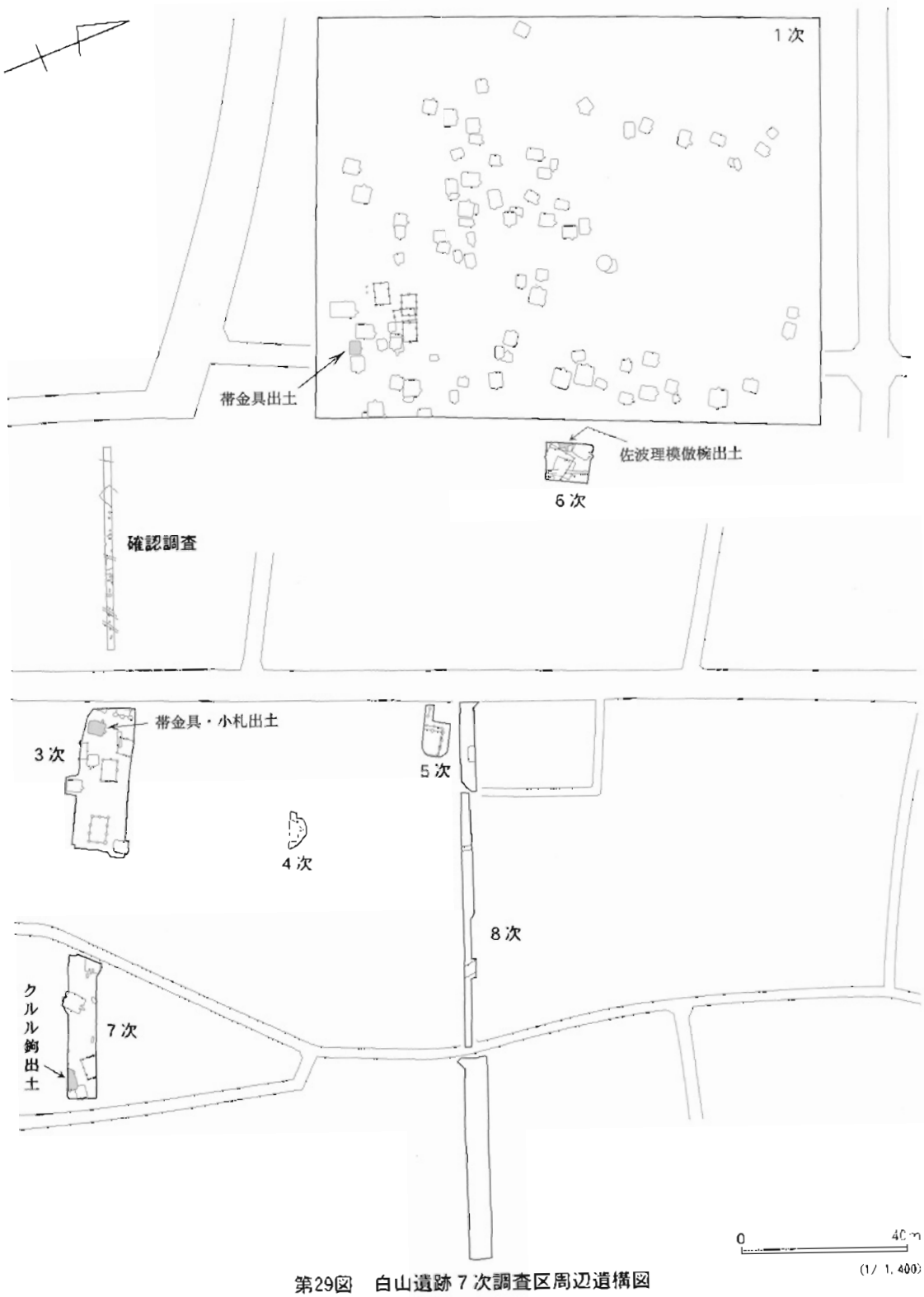
これまでの白山遺跡の調査成果によれば、本遺跡からは官衙的な遺構は検出されていない。ただし、本調査地点から１次調査区の南東端にかけて掘立柱建物群跡が分布し、その南東10mに位置する78号住居跡からは、帯金具が出土している。さらに、第２章で述べたとおり、榛沢郡家初期評家と想定される熊野遺跡が本遺跡の西に接しており、その北方には郡家正倉跡である中宿遺跡が存在する。

こうしたことから、白山遺跡の性格については、官衙的施設ではなく、官人層の居宅と推測される。

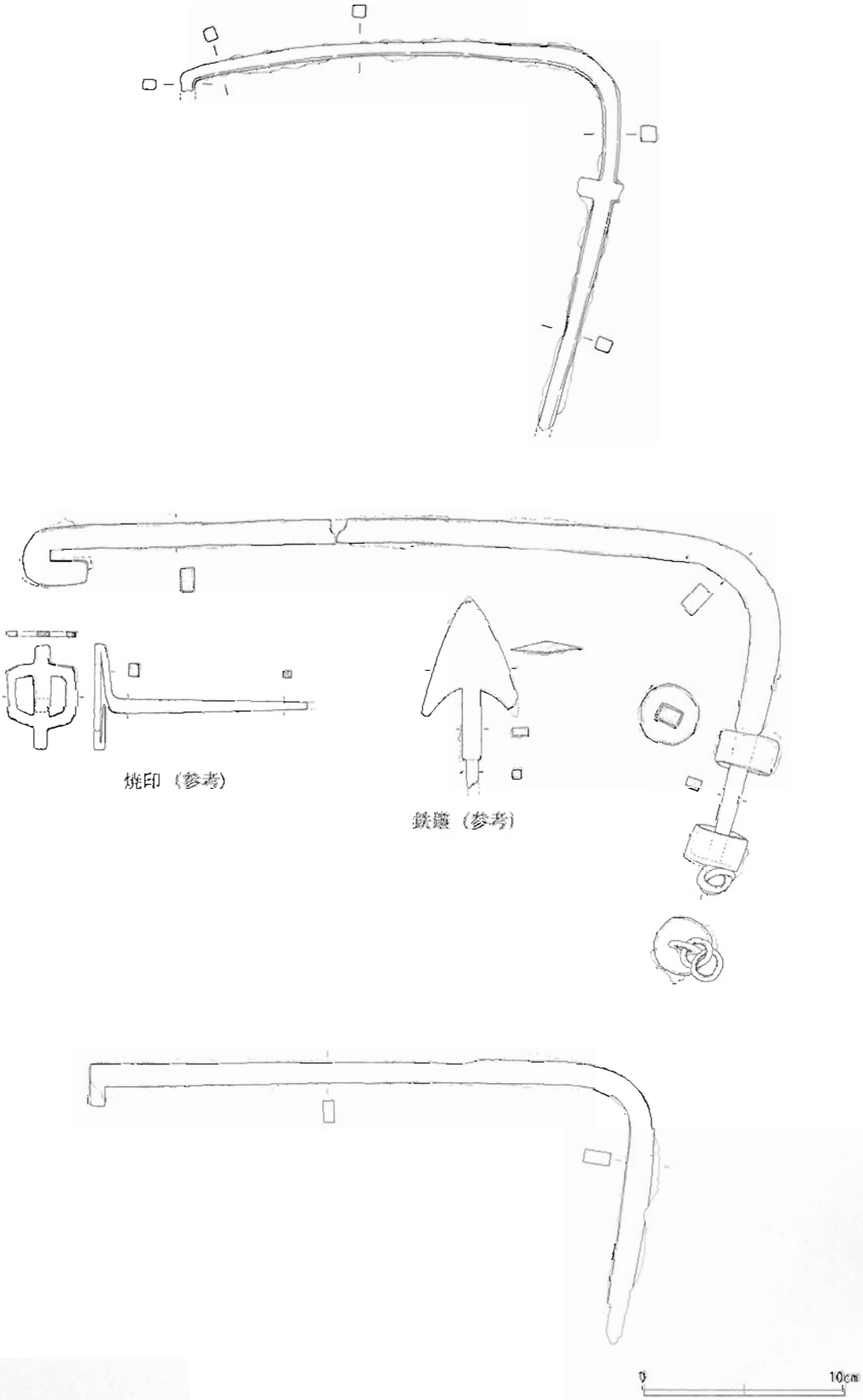
なお、郡域は異なるが本遺跡からほぼ真西へ６kmの地点に位置する大久保山遺跡ⅢA地区10号住居跡（９世紀中葉）からも鉤が出土している。解錠部27cm、軸部11cm、太さ1.3cmを測る。白山遺跡と同様にⅠ群に属するものである。

［参考文献］

・埼玉県埋蔵文化財調査事業団「清水谷・安光寺・北坂」1981
・埼玉県教育委員会「白山遺跡」1989
・坂本和俊「北坂遺跡」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会1994
・合田芳正「古代の鍵」1998
・早稲田大学本庄校地文化財調査室「大久保山Ⅶ」1999
・深谷市教育委員会「岡部町史－原始・古代資料編」2006

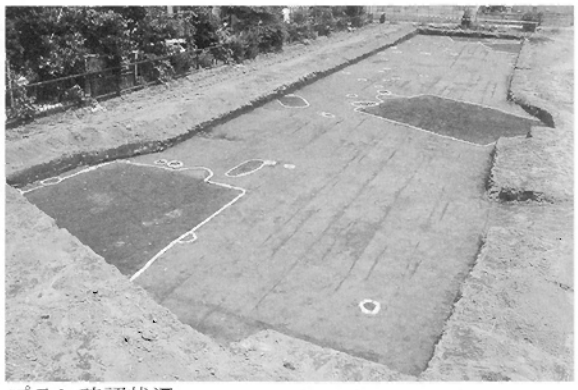


第29図　白山遺跡７次調査区周辺遺構図



第30図　鉤実測図（上から白山・北坂・大久保山遺跡）

写　真　図　版


プラン確認状況

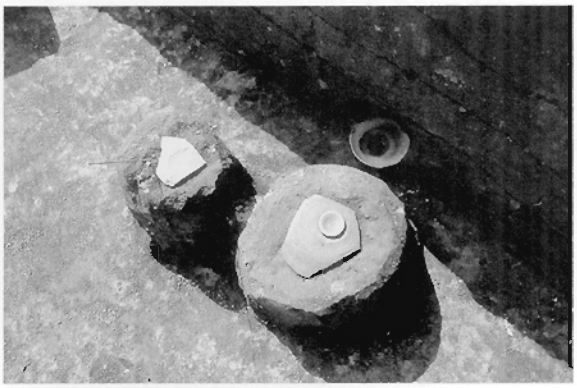
全景（西から）

全景（南東から）

１号住居跡

１号住居跡遺物出土状況(1)

１号住居跡遺物出土状況(2)


１号住居跡遺物出土状況(3)

１号住居跡遺物出土状況(4)

図版２

１号住居跡カマド

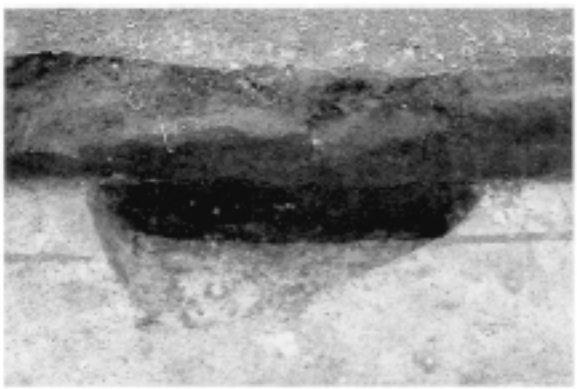
１号住居跡カマド遺物出土状況

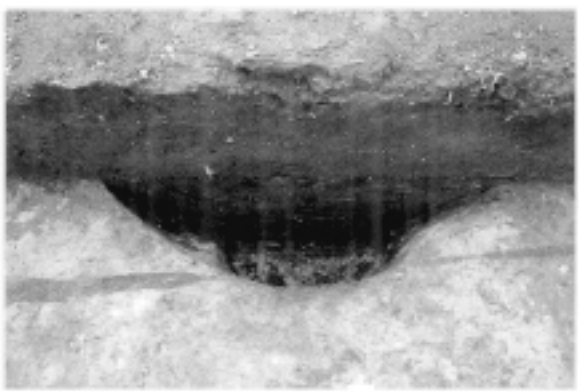
２号住居跡

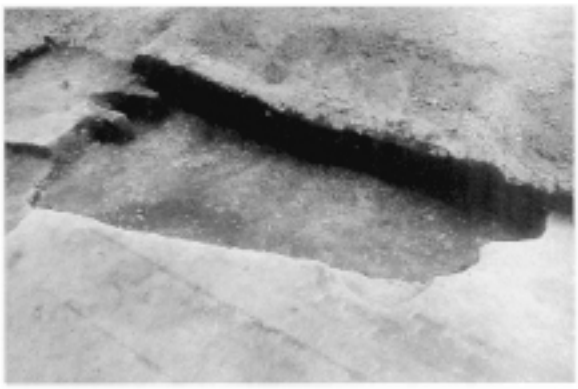
２号住居跡遺物出土状況(1)

２号住居跡遺物出土状況(2)

２号住居跡カマド


３号住居跡


４号住居跡



5 号住居跡

5 号住居跡カマド

5 号住居跡遺物出土状況(1)

5 号住居跡遺物出土状況(2)

5 号住居跡遺物出土状況(3)

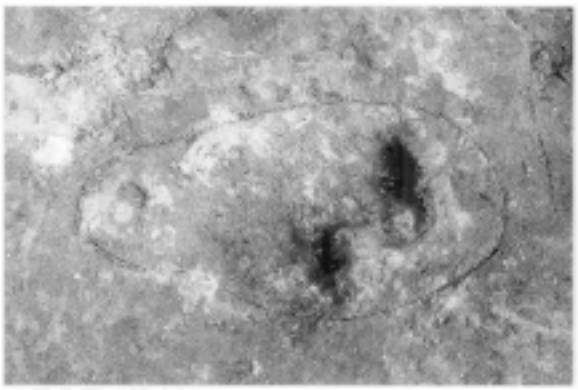
5 号住居跡遺物出土状況(4)

5 号住居跡遺物出土状況(5)

5 号住居跡遺物出土状況(6)

図版 4

5 号住居跡カマド遺物出土状況

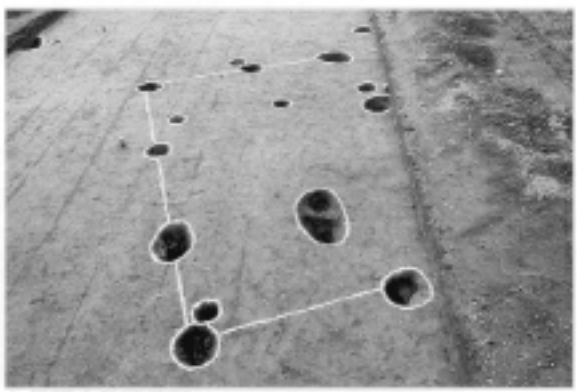

5 号住居跡鍛冶炉

6 号住居跡

6 号住居跡遺物出土状況(1)

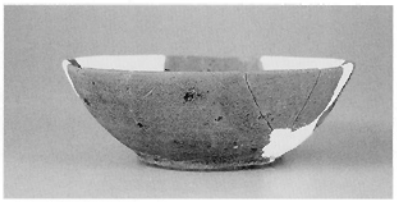
6 号住居跡遺物出土状況(2)

6 号住居跡遺物出土状況(3)


1 号掘立柱建物跡

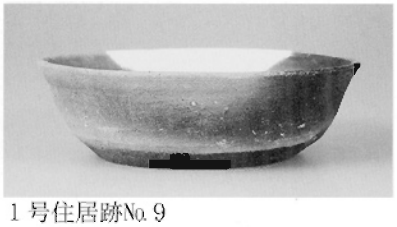
1 号土坑

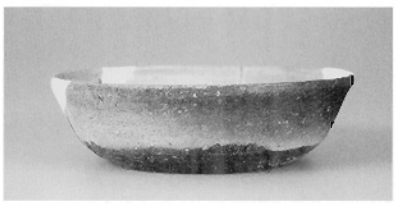
1 号住居跡No. 1


1 号住居跡No. 3

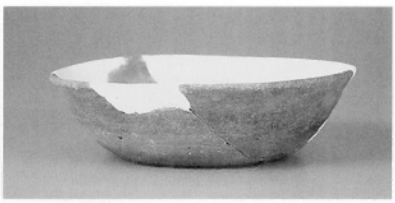
1 号住居跡No. 5

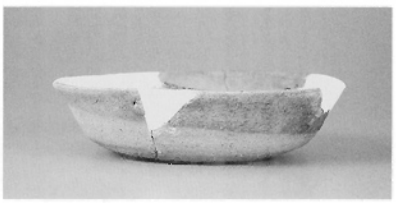
1 号住居跡No. 8

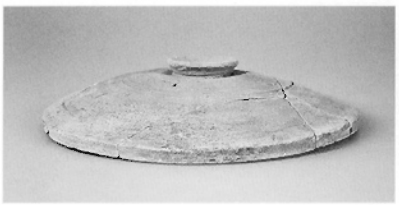

1 号住居跡No. 9

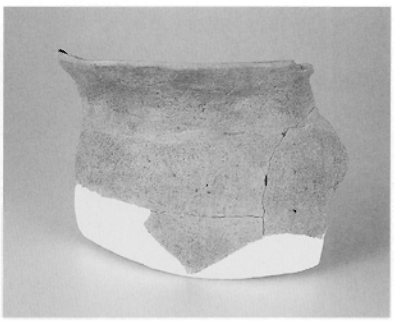

1 号住居跡No.10

1 号住居跡No.11


1 号住居跡No.12


1 号住居跡No.13

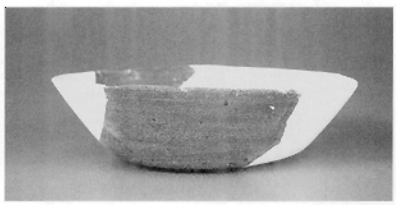

1 号住居跡No.14


1 号住居跡No.16

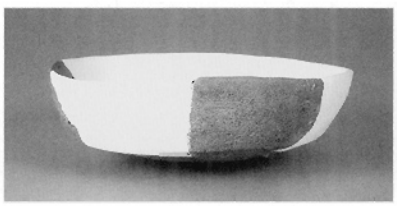
1 号住居跡No.17

2 号住居跡No. 1

2 号住居跡No. 7

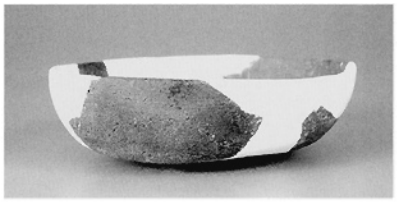

2 号住居跡No. 8

5 号住居跡No. 3


5 号住居跡No. 6

5 号住居跡No. 8

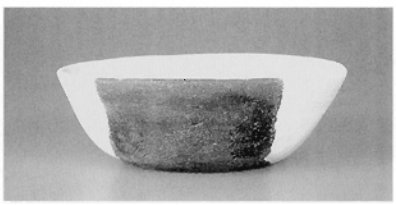
図版 6

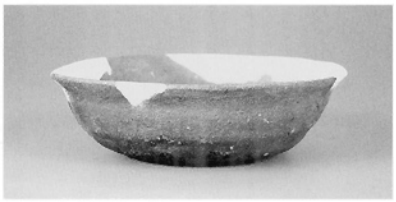

5 号住居跡No. 9

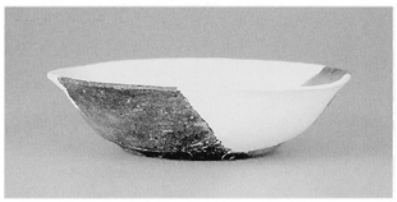
5 号住居跡No.10

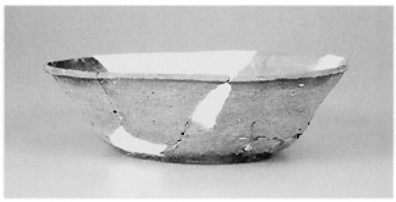
5 号住居跡No.11

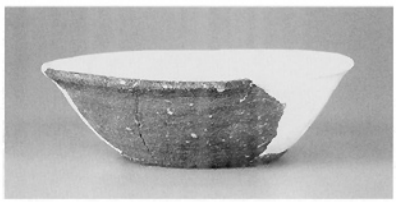
5 号住居跡No.16


5 号住居跡No.17


5 号住居跡No.18


5 号住居跡No.19


5 号住居跡No.20


5 号住居跡No.21

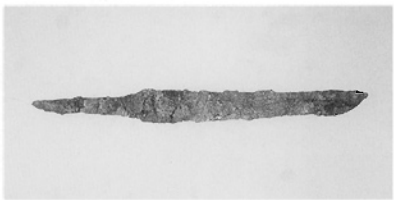
5 号住居跡No.15

5 号住居跡No.37

5 号住居跡No.40

5 号住居跡No.41

5 号住居跡No.44


5 号住居跡No.47

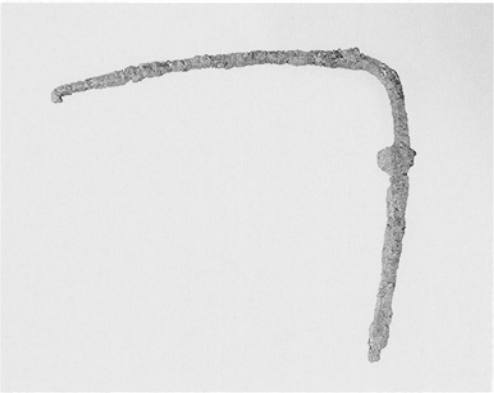
5 号住居跡No.48

5 号住居跡No.49

5 号住居跡No.50

5 号住居跡No.51

5 号住居跡No.52


5 号住居跡No.53

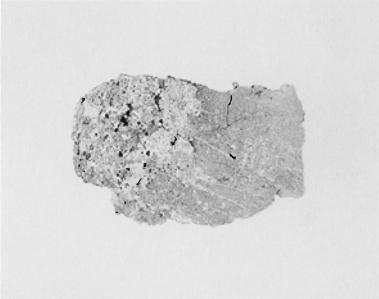
5 号住居跡No.54

5 号住居跡No.55

5 号住居跡No.56

5 号住居跡No.57

5 号住居跡No.58


5 号住居跡No.59

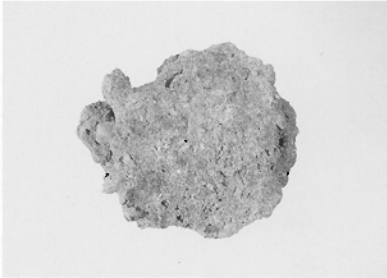
5 号住居跡No.60

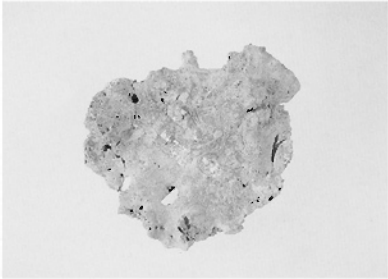
5 号住居跡No.61

図版 8

5 号住居跡No.62

5 号住居跡No.63

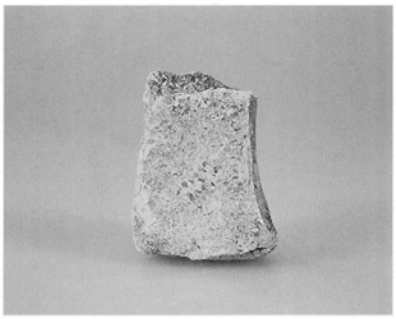

5 号住居跡No.64


5 号住居跡No.65

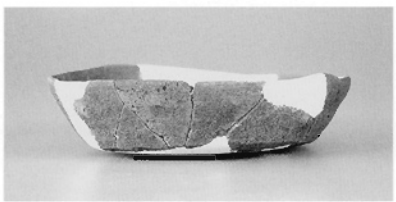
5 号住居跡No.66

5 号住居跡スラグ群

5 号住居跡No.67

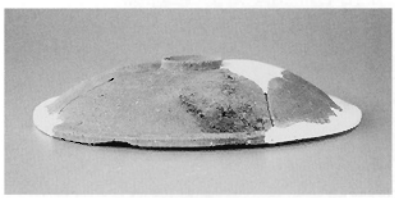

6 号住居跡No.13

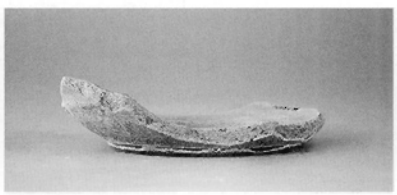
6 号住居跡No.14


6 号住居跡No. 1

6 号住居跡No. 2

6 号住居跡No. 3


6 号住居跡No. 6


1 号ピットNo. 4

2 号ピットNo. 5

報告書抄録

ふりがな	しろやまいせき
書　名	白山遺跡Ⅱ
副書名	
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	第81集
編著者名	宮本直樹・竹野谷俊夫
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366-0823　埼玉県深谷市本住町17-3番地　TEL048-572-9581
発行日	平成18年11月20日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
白山遺跡（7次調査）	埼玉県深谷市普済寺字前耕地1404番地	11218	63-008	36° 12′ 32″	139° 14′ 30″	平成10年8月5日から平成10年9月10日まで	195㎡	アパート建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 官衙跡 居館跡	奈良～平安時代 中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑	土師器 須恵器 鉄製品	9世紀前後と考えられる5号住居跡から、クルル鉤が出土した。市内では、北坂遺跡に次いで2例目となる。

白山遺跡Ⅱ

2006年11月20日

編集発行　●深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地３